32-444

アナトール・フランス短篇傑作集

紫蘭譯

明治
43. 3. 4
内交

はしがき

此書は現代佛國の文豪にして、又現に英國文壇の流行兒たるアナトール・フランスの、短篇小說集、『眞珠貝』中の九篇及『エピキユラスの庭園』中の一篇、都合十篇を譯したものである、

譯者は之によりて、敢て佛國現代文學の精華を移し得たりなどゝは夢にも思はぬ、只自然主義に非る佛國文豪の小說は如何なるものて有るか、英國文壇現下の寵兒たる作家の作品は如何なる面白いものて有るか、此二つの點の一端を示さんとして、短篇數種を譯して見たに過ぎぬ、

讀者の中に、此等輕快なる諷刺に充ちたる短篇小說又は物語

を讀んで、自然主義の作より外にも、面白いものが有ると云ふことを解し、更に進んで、佛文若しくは英文によりて、此等の原作の妙趣は勿論、フランスの他の著作の思想までも、研究して見たいと云ふ念を起さるゝ人が澤山に有つたら、夫こそ譯者の喜悅と滿足とは云ふ迄もないのみならず、原著者及英譯者の榮譽も此に過ぎないだらうと思ふ、

明治四十三年一月

紫蘭生識

(目次)

アナトール・フランス小傳
一、聖母の手品師……一頁
二、聖ユーフロシーン……二〇頁
三、スコラスチカ……五二頁
四、猶太の代官……六四頁
五、影供養……一〇八頁
六、レスリー・ウッド……一二四頁
七、ド・ルジー夫人……一五八頁
八、死の賜……一七六頁
九、鉛の兵隊……一八六頁
十、エリジアの野……二一四頁

アナトール・フランスの小傳

アナトール・フランスは、トルストーイ翁と共に現存せる人道の研究者中、最も偉大にして又最も敢爲なる人とまで稱せられて、現に歐洲の文壇を風靡しつゝある佛國の文豪て有ることは云ふまてもない。

彼は其名をジャック・アナトール・タイボールと呼び、アナトール・フランスは其雅號て有る、千八百四十四年を以て、巴里はヴォルテール波止場の老書店に生れ、十八世紀史の泰斗として盛名ある、タイボールトは其父て有る、長するに及んて古書經典寫本

等を手當り次第に書庫より引摺り出して愛讀し、佛國革命の原則に關しては父より其感情を傳へられ、聖人傳を愛讀せる母よりは禁慾教の理想に親しむことに習はしめられたので有る、だから彼が有ゆる作品には其幼時の經驗と印象とが到る所に認め得らるゝので有る。

彼が著した小説は其數三十餘冊に及んで居る、就中最初に現はれた小説は『ジョカストと痩猫』(Jocaste et le Chat maigre)と云つて、七十九年の作て有る、八十一年には、彼は『シルヴェスツル・ボナールの罪』(Le Crime de Sylvestre Bonnard)を著はした、此作こそは彼が最初の大作て有つて、彼は之によりて俄然として佛國現代小説家中の第一流に數へらるゝに至り、佛國學士院よりは賞讃

の辭を受くるの名譽を擔ふたので有つた。

其後短篇集『吾友の書』(Le Livre de Mon Ami 千八百八十五年)、次いで最も名あるものにして埃及砂漠の物語『ティス』(Thais 千八百九十年)、短篇集『眞珠貝』(L'Etui de Nacre 千八百九十二年)等現はれ、千八百五年には『ピエール・ブランシュ物語』(Sur la Pierre Blanche)、最近には物語四篇を收めたる『バーブ・ブリユーの七人の女』Les Sept Femmes de la Barbe-Bleue)が出版された。

彼は佛國の他の自然派の小説家と趣を異にし、元來が立派な學者て有つて、其思想に頗る英吉利的な處の多い人て有る、從つて其作には學者的、哲理的の傾向が絶えず現はれて居る、けれども此學者的な哲理的な所を包むには、輕い滑る樣な頓才と愉快

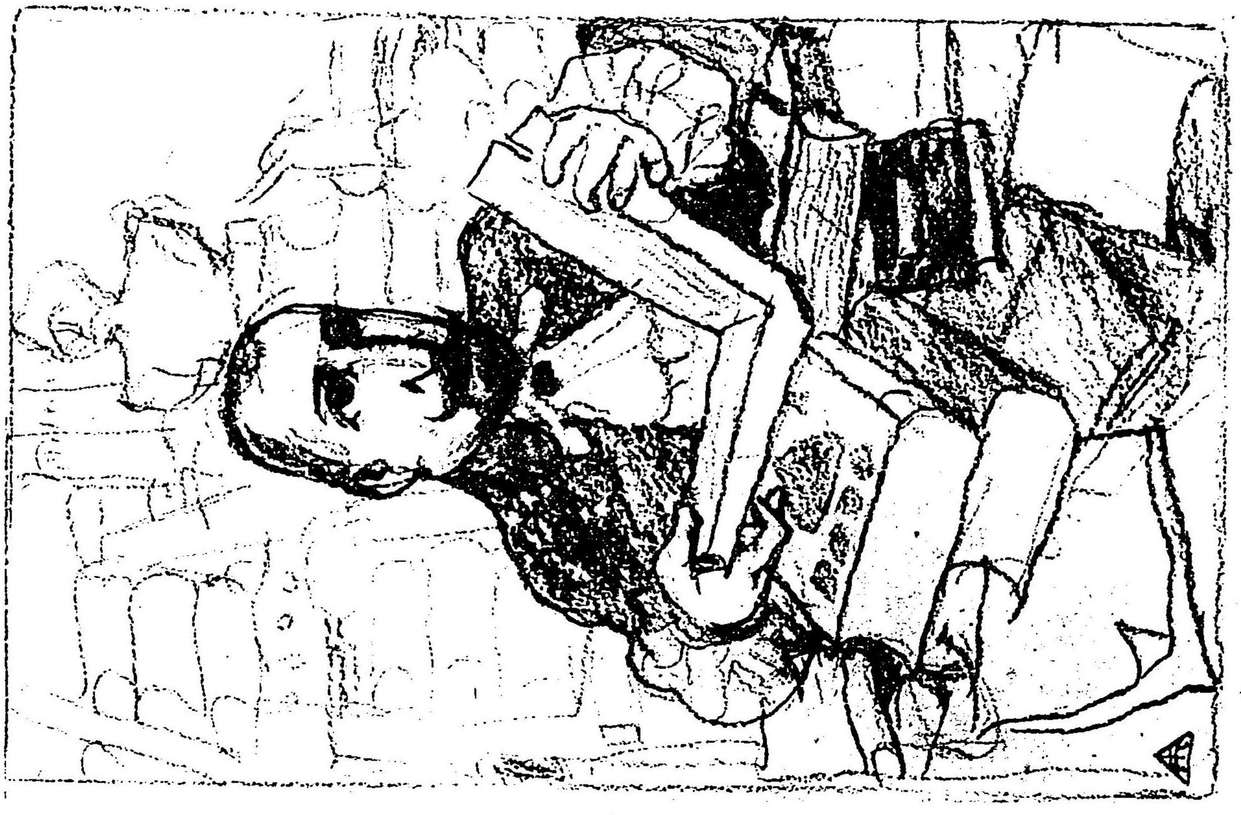
な心持の善い悪意のない嘲笑と、暖かい愛嬌のある反語とを以てして有るので、讀んで見て何となしに心持が善い、何方かと云へば淡如として輕快で有る、夏向て有る、短篇に至つては殊にさうて讀んで了つた後て玉露を飲んだ後の樣な心地がする。

彼は屢神聖なる人道の、單純なる禁慾主義に勝つべきことを說いて居る、此點から見れば彼は人道主義の禁慾家で有る、夫から又彼は絕えず迷信と僞善の惡むべきことを示して居る、けれども要するに、彼は佛國の滑稽諷刺家として有名なるラベレーの如き、而もラベレーの樣な矛盾のない、極めて愛嬌のある神聖なる諷刺家で有る。

近頃に至るまで、英國文壇に於ける彼の影響は極めて微々た

るもので有つたが、最近に於ける彼の英國文壇に於ける評判は大したもので、全集の樣な飜譯が續々として出版されつゝ有り猶ほ英國文壇に於ける現時の流行兒で有る。

ドイツ、ソルソルの仕事



アナトール・フランス 短篇傑作集

文學士 若月紫蘭譯

一、聖母の手品師

(一)

佛蘭西の治世の事で有る、コンピエヌの町に其名をバーナビーと謂つて熟練と力との妙技を演じては、田舍廻りをやつて居る一人の貧乏手品師が居つた。

天氣の好い日には彼は何時も大四辻の角に陣取つて、古毛布を擴げるに決まつて居る、そして極昔の手品師から習つた面白

訳が拙劣である。

い文句を一字一句も違えず述べ立てゝ、小供やのらくら者の連中を呼び集める、見物が集ると珍妙な態度をして、自分の鼻の先に錫の皿を載つけて釣合を取るので有るが最初の間は見物は何時でも之に無頓着な風をするに決つて居る。

けれども彼が逆立を演つて、キラ〳〵と輝く六個の銅球を空に投げ上げ、足で以て其球を受け取つたり、或は自ら其體を車輪の形を爲すまで後ろに曲げて項と踵とを喰付けて、十二本の小刀で巧に奇術を行り出すに至ると、賞讃の聲はドッと四方八方から起つて、金の纏頭は敷物の上に雨と降るので有つた。

此樣な風で有るに係らず、頓才によりて衣食の路を講ずる大多數の人々の如く、パーナビーは猶其生計を營む爲に大奮闘を

やらねばならぬので有つた。

彼は自ら汗を絞り油を垂らして、其日〳〵のパンを求めねばならなかつたので、寧ろ我等が祖先アダムが自己の失錯によつて得たる刑罰よりも、更に一層の刑罰を感ずるので有つた。

彼は又絶えず自ら働かんと欲する程の仕事を爲すことが出來なかつたと云ふのは外でもない、暖氣と天氣とは彼が花々しい奇術を演するに缺くべからざるもので有つて、宛ら花が咲き實が成る爲には此二つが矢張樹木に對して必要缺くべからざるもので有ると同樣で有つた、冬になると彼は誠に愍然なるもので、木の葉が落ちて了つて、丁度死んだ樣な心地のする樹木と何の撰ぶ所はなかつた霜雪の地面は手品に對しては極めて

無情なるもので有つて、嚴寒の季節は彼をして蟋蟀の如く、寒氣と飢餓とに苦ましむるので有つたけれども元來素朴なる彼は何の不平もなく能く自分の苦痛を忍耐するので有つた。

彼はこれまで嘗て富の根源に就いて熟考し若しくは人間の境遇の不平等なる事に關して、何等の思考を費した事もなかつた、例令現世は如何ばかり苦痛の世界で有らうとも未來は必ず此苦痛を補ふに足る丈の快樂が有るに相違ない、とは此男の確信する所で有つて、又實に彼を助くる唯一の希望で有つた、彼は惡魔に其魂を賣つたと云ふ狡猾にして不信なメリー、アンドリユースの樣なものではなかつた、彼は極めて正直で有つて、未だ嘗て神の名を汚した事は無かつた、それから又獨身の人で有つ

たが、未だ嘗て近所隣りの妻君に對して媚を呈した事などはなかつた、蓋し彼は聖典サムソン傳中の『婦人は常に强き人の敵で有る』と云ふ言を確信して居たからで有る。

誠に彼は肉慾の快樂に耽るが如き人ではなかつた、而も其手より酒杯を奪取らんことは、常に神の爲に杯を捧持せる女神ヒーベの手より之を奪ふよりも、彼に在りては更に大なる打擊で有つた、バーナビーは僅嚴の態度に在る時でも、天氣が暖かくなると必ず杯を手にすることが好きで有つたからで有るけれども彼は充分神を畏敬する價の有る人で、聖母に對しても能く敬虔の念を斷たぬので有つた。

彼は常に教會に入つて、聖母の像の前に膝をづいて、

『おゝ聖母よ、神の喜んで我が身を終り給はんまで、願ふは我が身を守り給へ、我が身の世を去りたらん後には、願くは吾に天國の樂を與へ給はんことを』

と云つて祈ることをば決して怠らぬので有つた。

（二）

或る物淋しい濕つぽい日の夕暮のことで有る、バーナビーは例の銅球と小刀とを古毛布に包んで小脇に擔へながら、よしや夕飯を喫することが出來ないまでも、せめては一夜の露を凌がんが爲の小舍でも見付んものと、悲しげに頭を垂れて其路を辿れる折しも、自分と同じ方向に進む一人の僧侶に出遇つて、極め

て丁重に禮をしたので有つた、やがて二人は同じ樣な速力で歩んでる中に、遂に互に語を交ふるに至つた。

坊さんは謂つた

『モシ、貴方は如何して全然眞青な着物を着て居らつしやるんじやね、ひよつとすると何か神秘劇の道化の役でも演る爲でも有らつしやるかもな』

『和尚さん、全く左樣ではムいませんので、へゑ、御覽の通り俺やバーナビーと申しやして、手品師なんでがす、何時でも日々のパン丈儲かりさへすりや、まあ世の中に此麽面白い仕事はなからうと思つて居りやすが、へゑ、』

『バーナビーさんとやら、物を言ふにや、チト氣をお付けなされ

い、俗侶の生活より面白い職業は無いもんぢや、此仕事を行つてるものは、神様や聖母や、聖徒の讃美を職業にして居るので、本當に宗教の生活は、我主に對するマア一個のお止みなき讃美歌てすわい、』

『和尚さん、俺や本當に馬鹿の云ふ樣な事を申しやしたわい、貴方の御職業は如何したつて俺なんぞのと比べられりやしません、一體鼻先へ棒を立てる、其上へ銅錢を載つけて踊るなんて事あ、よしんば幾何か功績が有るにした處で、貴方がたのお賞に與かる樣な功績じや御わせんや、けど和尚さん、俺もこれて貴方の樣に毎日喜んて自分の役目丈を歌ひたいので、殊更一番貴い聖母の讃美丈あやつてるのてがす、實は俺や聖母にや特別な願を

かけて誓つてるのてがすから、へゑだから坊さんの生活てもする爲にや、何てがす、ソアソンからボーベーまて六百餘りの町から村からに能く此饗當て知られてやすが、喜んて其藝當も止めつちまつても善いと思つてますよ、へゑ、』

坊さんは手品師の飾なき純朴に感動させられた、そして彼も元來機智のない男ではなかつたので、直にバーナビーをば聖書の所謂『決心善き人には地に在つて平和』と云ふ風な男だと思つて答へた、

『バーナビーさん私と一所に居らつしやれい、私の寺へ入門させて遣はさう、砂漠の中で埃及の聖メリーの御案内をなさつた神樣は、救世の路に貴方を案内させるために、此處で私を貴方に

出遇はさしやつたのでせうわい、」

バーナビーは驚て僧侶になつた、彼が入門した寺院では、信者は互に聖母の禮拜を競ひ、各〻天賦の才智と熟錬とを搾つて聖母の德の讃美に心を盡すので有つた。

住職は其役目として學者の則に從つて聖母の德を論ずる書物を書いて居つた。

弟子の一人モーリスは、巧妙なる手蹟を以て、此等の論文を硬皮紙に寫して居た。

他の弟子アレキサンダーは精巧なる彩色畫を以て此書を飾るので有つた、其中にはソロモンの玉座に腰を掛けたる聖母マリアが有つた、其聖母の足下には、四頭の獅子が守りをして頭を

圍らせる後光の邊りには七羽の鳩が飛び廻つて居る、其七羽の鳩こそは聖靈の七個の賜で有つて恐怖と敬虔と知識と勢力と、熟慮と理解と才智の賜が即之れで有る、夫から聖母の伴侶としては、六人の金髪の處女、即謙遜謹慎退讓服從潔白と溫順の六人の處女が其側に侍べつて居る。

そして足下には二人の眞白な小さい裸人が何物をか頻りに歎願の態度で有る、二人は即ち魂の健康を望んで聖母の有力なる助力を哀願して居る、そして其哀願は決して無益なものではなさゝうに思はるゝので有る。

此繪と向き合つた頁には猶他の一人の弟子がイーブの像を畫いて居る、此は滅亡と救助——貶黜されたるイーブと稱讃を

蒙れる聖母――との二つが同時に一見し得られんが爲て有る、

更に驚くべきは此書中には「生ける水の井戸」泉、百合、月及頌歌によれば天の門及神の市有りと稱せらるゝ『圍まれた る花園』等有ゆる聖母の紀號は悉く描かれて居るので有る。

猶一人の弟子マーボードは又等しく最も聖母を愛する一人で有つた。

彼は絶えず石像を彫んで其日を送るので有つて、そして其髪と眉毛と頭髪とは常に塵に塗れて其色白く、眼は絶え間なく泣き續けた人のやうに腫れ上つて居つた、けれども彼が勢力と快活とは可成の老年なるに係らず、少しも減退せずして、聖母が猶ほ老年の彼を愛撫せることは明で有つた、マーボードは、玉座に

坐せる聖母を刻んだので有つた、像の額の周圍には眞珠を以て飾つた圓形の後光が光り輝いて居た、彼は注意に注意を加へて着衣の褶を以て聖母の足を蔽はんことを努めた、其昔豫言者が聖母に就て語つた『わが戀人は「圍まれたる花園」の如し』と謂へるに基いたので有る。

時ありては彼は又優美の姿其面に溢れ、宛から『汝はわが母、より生れたるわが神なり』と物言ひげなる小兒の似顔を以て聖母を表はさんとしたので有る。

其他聖母の德を賞せんとして、拉典語を以て散文及詩形の讃美歌を作つた多數の詩人が有つた、而して其の中に詩及俗歌を以て聖母の奇蹟を謠つた、ビカーヂー派の僧侶さへも混つて居

つた。

（三）

バーナビーは一同の聖母賞讃の競爭と彼等の勞力の花々しき成功とを見て心中甚だ忸怩として、徒らに己が身の無能と素朴とを嘆くのて有つた。

『あゝあ、一同の樣に、自分が全心の愛を誓つた聖母に對して、充分な讃美をやることの出來ないなんて如何して其麼つまらない自分なのだらう』彼は一日寺内の木立の少ない小園を獨り淋しげに散歩しながら思つた、「あゝあ！俺は本當に藝無しの山出しだ、聖母！私は說教をしたり、立派な讃美論を書いたりす

ることも出來ねば、さらばとて器用な繪も畫けず眞に迫る樣な彫刻も行れず、足拍子に合ふ樣な歌さへも出來ず、思ふ程に勤行をすることが出來ません、あゝ無藝無才だ！』

彼は斯んな風に默いて〳〵遂に自ら悲哀の人となつたけれども、或夜僧侶等一同は閑談に耽つて居る折しも、彼は僧侶の一人から或る所に福哉マリアヤヤヤの語を繰返へすより外には何事をも知らぬ一信者が有つた、此憐むべき信者は、自分の知人から甚だしく其無能を輕蔑されたにも係はらず、其死後に於ては Marie の五文字を祝はんが爲に其口から五個の薔薇の花片を吐き出して熱心な信仰を證明したと云ふ物語を聞いた。

バーナビーは此話を聞いてる間にも、更に聖母の愛らしき親

切に驚いて幸福なる死人の教訓に感動し、其心は熱心に溢れて、天に在します聖母の光榮を進めんことを切望したので有る。

彼は如何にして其切望を遂げんかを熟考したので有つたが遂に何等の方法をも案出することが出來なかつた、かくて彼は日々失望落膽の人となるので有つたが、或日の朝て有る、彼は喜んで其床を蹶つて起ち、直に急いて禮拜堂に行つた、夫から一時間餘りして彼は歸つて來たが、晝食の後にも再び禮拜堂に行つた、そして矢張一時間計して歸つて來た。

爾來彼は斯の樣な人なき時を撰んては日々禮拜堂に行つて他の同僚が閑談若しくは仕事に耽つてる間を此處に費すので有つた、其中に彼の悲哀は漸く消えて了つて、歎息の聲は再び彼

の口を洩るゝことがなくつた。

彼が此不可思議なる擧動は忽ちにして他の僧侶一同の好奇心を覺ました。

彼等は互に其何の目的なるべきかを尋ね合ふのて有つたが、バーナビーは猶獨り退いて、熱心に自分の樂みに耽ることが出來るので有つた。

有ゆる信者の有りと有る擧動に對して充分の注意を怠らぬのが住職の職務て有つたので、住職は遂にバーナビーが禮拜堂に隱るゝ間を見守らうと決心した、

やがて一日バーナビーが例の如く禮拜堂に閉ぢ籠つた折を見計らつて、住職は他の二人の僧侶を伴ふて禮拜堂に行つた、三

人は戸の隙目から内部の様子を見屆けんとしたのて有る。

バーナビーは此時聖母の拜壇の前に逆立をして、六個の銅球と十二本の小刀とを以て、例の手品の眞最中て有つた、彼は實に聖母の德を讃美せんが爲に、既に榮名を博せる是等の奇術を演じつゝ有つたのだ、三人の僧は之を見て驚いた、そして元來素朴なるバーナビーの此行は彼が自分の智惠と熟錬とを搾つて聖母に對する勤行を果さんとしつゝあるのだと解することが出來なかつたので、二人の老僧は直ちに絶叫して、彼が聖神の罪を鳴らすのて有つた。

住職はバーナビーの心の清淨無垢なるを了解して居つたのて有るが、餘りの無作法を面り目擊して、バーナビーは狂人とな

つたのだと決論して了つた、三人は即ち直ちに彼を禮拜堂の外に引摺り出さんとするので有つたが、此時不可思議にも聖母は拜壇の段を下つて靜かに手品師の前に進み寄り、空色の衣の袖を以て、ハラ〳〵と流るゝバーナビーの額の汗を拭はんとするのて有つた。

住職は驚いて敷石の上に頭を垂れて謂つた、

『純朴な心のものは仕合せだ、斯ふ云ふ人にこそ見神の德が有るからだ』

すると二人の老僧は之に續いて、「アーメン」と謂つて地に接吻した。

《をはり》

一、聖ユーフロシン

ユーフロシーンはロミユラスの一人娘て有つた。

ロミユラスは亞歴山市の富豪て有つて、其子の教育には殊の外意を用ゐ、歌舞音曲は勿論算數の道をも熱心に奬勵したのて有つた、で丁度年頃に成るやならずの頃には、ユーフラシーンは人並外れて狡猾くなつて來て何事についても其才智が著しく目立つのて有つた、丁度ユーフロシーンが數へ年て十八の時て有つた、次の三つの疑問に正しく答へたものには褒美として金のコップを遣ると云ふ布令が市から出た。

第一問、吾が父は光輝あれども吾は暗黒の子なり翼なき鳥な

れども吾は雲に上ることを得べく、人を害ふの光鋩を有せずと雖も逢ふ人をして悉く涙を流さしむ、而して吾は生るゝと同時に空中に消滅す、乞ふ知るものは吾が名を語れ。

第二問、吾は吾が母を生めども猶吾が母より生る、時ありては長く時ありて短かし、問ふ、吾が名を何とぞ云ふ。

第三問、甲は乙と丙の三分の一との和丈を得べく、乙の所得は丙と甲の三分の一との和に等く丙の所得は乙の所得の三分の一に十圓を加へたるものに、相當すとせば、三人に屬すべき所得は夫々幾何ぞや。

其後所定の日になつて見ると、數多の青年は皆金の杯が欲しさにドヤ〳〵と試驗官の前に顯はれた、けれども誰一人として

悉く正解を與へたものとては無かつた、此有樣を見て長官は已を得ず此試驗を將に閉ぢんとする折て有つた、此時初い〳〵しいユーフラシーンは靜かに試驗官の側近く進み出でゝ、自分の答が聞いて貰ひたいと願した、側に居る人は悉く女の謙遜なる態度と兩頰紅を潮して辱しげにも亦あどけなき風采とを讃歎した。

女は眼を垂れて口を切つた。

『いとも〳〵名高き方々よ、妾は今全智の始にして又終に在します耶蘇基督の光榮を稱へましたからには、此處で一つ御提出の問題に答へて見る事に致しませう、先づ最初のから申し上げますと、暗黑の子供と云ふのは火から生れて空中に上り、人の眼

を刺戟しては涙を出させる烟の事てムいませう、第一問の答には此丈て澤山てせう』

『夫から第二の答はと申しますと、母を生み又母から生れると云ふものは日より外にはムいますまい、そして日と云ふものは季節に從つて變るもので、時には長く時には短かい事もムいます、二問の答も之て澤山てせう』

『扨愈第三の答てすが、甲は四十五、乙は三十七と半、丙の所得は二十二と半、之が第三の答てムいます』

居併ぶ試驗官等は此等の答の正確なるに驚いて、ユーフロシーンに褒美を贈ることにした長官は即ち立ち上つて金の杯を彼女に與へ名譽ある俊才表旌の爲にパバイラスの花冠を其頭

に冠らせたやがて乙女は群集の中に樂隊の音に送られて自分の家に歸つた。

けれどもユーフロシーンは信仰の深い耶蘇教の信者で有つて、殊には此樣な名譽て煽て上げられる樣な女でなかつたので、世の並々の人の頭の空なるを認むると同時に、行く〳〵は自ら其敏捷なる智能を應用して今一層注意の價ある問題――例へば耶蘇の名の文字が表はして居る數の和の計算とか、此數の不思議な性質觀念と云ふ樣な事柄を解釋して見せると云ふ決心をしたので有つた。

其中にユーフロシーンの智慧は一層の進歩を加へる、容姿は愈〳〵美はしくなつて來て、結婚を申込んで天晴婿君の榮譽を擔は

んとする青年が殆んど數を知らぬ程て有つた、其中に、非常な金持のロンヂヌス伯と云ふのが有つた、當時ロミユラスは自分の邸宅庭園等に贅澤の限を盡して非常に多額の費用を拋ち財政殆んど困亂の極に達し居たる事とて、斯の如き有力の人と婚を結ぶことの自己の問題を回復せんとするには非常なる利益なるべき事を思ふて、彼はロンヂヌスの申込をば直に快諾したので有つた、實にや亞歴山市中最も驕奢を極めたものゝ一人て有つたロミユラスは、自分の邸宅内の大圓頂格の下に、サファイアの樣な燦然たる一個の地球儀を設へ、其上には所在正しく數多の寶石を以て天躰を象ると云ふ風に巨額の金錢を投じて最も驚くべき機械力の例證を集めやうとした、夫から其内には亦へ

ローの作つた香水を吐き出す噴水と其外巧に人の姿を倒さに映す二ッの鏡とが有つた、そして其一方の鏡の前に立つた人の姿を恐ろしい丈の高い痩せた人と見せるに反して、一方の鏡は人の姿を非常に低い太つたものに映すもので有つたけれども此邸宅に於て最も不思議な光景と云ふのは小鳥の群がつて居る莢の藪で有つて、群つて居る無數の鳥は宛ら生きたものゝ如くに機械の力に依て歌ひもし羽ばたきもするので有る、そしてロミユラスは殘りの金錢をば自分の好きな機械玩弄物を得る爲に費して了つたので有つた、之がやがてロミユラスが金滿家のロンヂヌス伯の申込を喜んで受納した理由なので有る、是に於てか彼は自分の力に及ぶ限り有ゆる手段を盡して、娘に向

つて結婚を果さんことを勸むるので有つた、そして彼は此によりて娘の幸福と自分の老後の慰安とを期待して居たので有る、けれどもロミユラスが娘に向つてロンヂヌス伯の要求を容れんことを勸むる度に、乙女は側向いて何事をも答へぬので有つた。

一日父は娘に向つて曰つた。

『ユーフロシーン、伯爵は亞歴山市中で一番立派で、一番金滿家で一番貴い人だとお前はお思ひでないかえ』

ユーフロシーンは沈重の態度で之に答へた。

『お父さん妾も全く左樣思ひますわ、本當に此市中で家柄や財産や立派な事に於てはロンヂヌス伯爵に優るものつて有りや

しないと謂ふことをば妾も信じてますよ、從つて若し妾が伯爵と結婚することを拒んだとすると、其代りに出て來て妾の決心を變へさせる樣な人は外には一人も無いてせう、けれど妾の決心心と云ふのは處女の此體を吾が主基督に献げると云ふ事なのですよ、』

ロミユラスは娘の此決心を聞て大に怒つた、そして俺は二人を無理にでも一處にする法を知つて居るぞと謂つた、そしてグラ〳〵と嚇し文句を無下に並べ立てると謂ふてもなく、此結婚は既に自分の胸に決した處て有るから猶豫なく實行しび了ひたいけれども、萬一親の威光が足りないと云ふことて有るならば、彼は皇帝の權力を借りても好い、皇帝は神聖て有つて上流婦

人の結婚すると云ふ樣な公けな而も國家の重要事件に於て、娘が父の言葉に從はぬと云ふ樣な事を許すべき筈はないと云ふことを附添へて云つた。

ユーフロシーンは當時君士旦府に在します皇帝に對して父が頗る勢力を有つて居ることを知つて居た、そして此危險の地位に在つては却てロンヂヌス伯以外には自分の助けになる人は更に無いことを見て、直に伯に向つて使を遣つて、自分の家の禮拜堂の中て密會をして呉れろと申込んだ。

希望と好奇心とに驅られたロンヂヌス伯は其身を金銀珠玉に飾り立てゝ、取るものも取り敢えず禮拜堂へと急いだ、乙女は一刻も伯を待たせなかつた、けれども現はれて出た乙女が、しど

ろに髪を打亂して、何物をか懇願する人の樣に、黑い面被を冠つて居るのを見たるロンヂヌス伯は、不吉の椿事の起り來れるに非ずやを想ふて先づ其胸の騷ぐを覺ゆるのて有つた。

ユーフロシーンは先づ其口を開いた。

『世にも名高きロンヂヌス樣、若し貴方が仰有る通りに妾を可愛がり下さるならば、貴方は少しでも妾の不機嫌を招くのが御厭て御座いませうね、そして若し貴方が此妾の體から自分の樂を得やうとして妾をお宅へても連れて行らつしやらうものなら、夫こそ本當に妾に取つては大打擊て、妾は直に死ん了ひますわ、と云ふのは妾は心て、自分の體を吾が神耶蘇基督樣に獻げて了つたのてすから、そして神樣は有ゆる愛の始て有ると同時

に又終なんてすからねゑ』

けれどもロンヂヌス伯の答は斯うて有つた。

『いとも名高きユーフロシーンの君よ、戀は吾々の意志よりさへ强いものだ、だからこそ吾々は恪氣深い主人の前へ出た樣に、戀の前へ出ると頭を下げなければならぬのだ、私は戀の命ずるが儘に貴女に對して振舞ふことにしませう、そして其戀は今私の妻として貴女を需めて居るのてすよ』

『神樣の手許から其神樣の許嫁を奪い取うと云ふことが人間——殊に名高い人に相應しい事て有りませうか』

『其事に就てなら貴女とよりも僧正達と相談することにしませうよ』

此等の言葉は乙女をして最も甚だしき恐怖の念を起さしめたので有る、感覺ばかりに支配された亂暴の人から同情を得やうと期するのが抑の間違で有つて、自分獨りで神に誓つた秘密の誓は坊さんも強ひては承認も出來まいと悟つた乙女は、窮鼠猫を喰むの例に洩れないで不安の餘りに遂に驚くに堪えたる不思議な奸策を案出したので有つた。

自分の決心が着いて了ふと乙女は父の希望にも戀人の懇願にも詐つて應ずることにした、そして乙女は婚禮の吉日を撰ぶことをさへも承諾した、ロンデヌス伯は即ち婚禮用の櫃に容れるべき金銀珠玉を花嫁の爲に撰び定めさせ、更に十二枚の打掛を注文させたので有つた、そして其打掛の裝飾としては之に聖

書中の景色や希臘の傳説動物の歴史並に紳士淑女を扈從とし
たる皇帝及皇后の神々しい模樣を刺繍させたので有る、其上に
櫃の一には紫色に染めた羊皮織の上に金字で書いて、象牙と黄
金の表紙に挾んだ澤山の神學書と算術書とが收めて有つた。

けれどもユーフロシーンは其後終日獨りで自分の室に閉ぢ
籠つて、人に對しては自分で婚禮着の仕度をせねばならぬから
と謂つて更に

『どうも妾の着物は人に裁つたり縫つたりして貰ふと一寸も
適合はなくて困るんですよ』

と謂つて居た。

そしてユーフロシーンは、實際に於て朝から晩まで忙がはし

げに針の手を運ぶので有つた、けれども彼女が斯の如くして秘密の中に作る所のものは、處女の表象の面被にもあらず亦白無垢にも非ずして、粗末な頭巾と短かい下衫と寛い袴と云ふ市中で若い職人の一般に着て居る仕事着で有つた、そして彼女は此の計畫を實行するの間は、正直と云ふものゝ成功の始にして又終なる耶蘇基督をば絶えず祈りに祈るので有つた、かくて婚禮の日と定められた丁度八日前の事で有る、ユーフロシーンは首尾能く自分の秘密の仕事を成就した、夫から乙女は暮れるまでは神に祈を捧げて、やがて平常の通りに父の接吻を受けると直に自分の部屋へ歸つて、黄金の樣な髪の毛を惜氣もなくポツリと斷ち切つて了つた、やがて乙女は

手製の下衫を纏ひ毛の紐を以て腰の周圍に袴を結ひ附け頭巾に顔を包んで深更家人の寢靜まつた頃を窺ひ靜に家を忍び出たので有る、丁度此時主人を知れる犬は暫くは其後を追ふて忍び行くので有つたが、是も遂には家に歸つて了つた。

街には最早人通りは無い、聞ゆるものとては只泥醉の餘りに折々頓狂な聲で狂ひ叫ぶ船乘の連中と、お役目大事と泥棒警衛に彼方此方を迴る巡羅の人の重たげなる足音のみで有つた、神の護りあればにや、何人にも路を遮らるゝことなくして、ユーフロシーンはひたぶるに其路を獨り急ぎに急いだ、やがて亞歴山市の數ある門の一つを通り抜けると、乙女はババイラスと青蓮の生ひ茂れる堀割に沿ふて路を沙漠の方へと取つた、丁度夜明

の頃を勞働者計りの憐むべき村を通る時て有つた、戸口先て無花果製の早桶を磨きながら歌つて居る老人が有つた、ユーフロシーンがお爺さんの眞前へ來ると、髯武者のお爺さんは驚いた樣な顏附て叫び出した。

『ジユピターの神樣に誓つて云ふが、此處に赤ん坊のイロス樣が居らつしやる、お母さんの所へ小ちやい膏油壺を提げて行かつしやるのだ、マアあのおいとしい立流なこと、本當にピカ〳〵して引附けられさうだ、神樣が逃げちやつたなんて云ふ奴あ、彼あ皆嘘突だ、でも此お子は本當の神樣なんだものを』

細心至らざるなきユーフロシーンは此言葉を聞いてお爺さんの邪教徒なることを知り、其無智なるを憐んて、之が濟度を神

に祈つた、すると其祈禱は許されて名をボローと言つた早桶職人のお爺さんは、其中に改宗してフイロセオスと謂ふ名を貰つた。

やがて勞れ果たて足を引ずつて一日の旅の後に、ユーフロシーンは或るお寺に到着した、和尙さんの名はオノフリウスと謂つて、六百人の弟子は悉く聖パロミウスの立派な掟を守つて居る、ユーフロシーンは和尙さんに面會を願うて謂つた。

『お父樣、私はサマラグヅスと申して孤兒でムいます、私は斷食と後悔がしたさに參つたのでムいますから、如何か此お寺へ留めて頂きとう存じます』

當時百六歳と云ふ高齡に達して居た和尙さんは答へた。

『我が子、スマラグッスさん、貴方を此處へ案内して來た貴方の脚は立派なものじや、それから此寺の戸を叩いた貴方の手も美しいものじや、貴方は斷食と禁戒で飢渇に陷らうと云ふ、宜しい、滿足の出來る樣にして上げませう、まだ清淨無垢の間に世の中から飛出す人間は仕合じや、男の心は市中殊にも亞歷山市では其處いらにうよ〳〵してる女の爲に恐ろしい危險に露されるのじや、女と云ふ奴は男には險呑なもので、俺の樣な此老爺になつても、考丈は體の中に飛込んで全身をぶる〳〵震はせることが有る、で萬一汚らはしい女人でも此神聖な家の中に這入つて來たら、最後、俺の此凋びた腕でも直に元氣を恢復して、なぐりつけて此處から追拂つて了ふに躊躇しやあせぬ、ねゑ神樣を拜み

神樣の事業を尊ぶのは吾々の勤めじや、けれども神樣が女と云ふものをお創りになつたと云ふのは神樣の深い秘密じやテ、兎に角に、我子サマラグッスさん、マア此處にお留んなさい、此處へ貴方を案内されたのも矢張神樣でせうよ』

ユーフロシーンは斯の樣にしてオノフリウスの家族の一人となり僧衣を身に着ける事となつた。

僧房に入つて以來、ユーフロシーンは自分の計畫の成功を喜んで愈敬神の念を深ふした、思へば自分が一夜其姿を隱して以來父と戀人とは皇帝の命令を以て自分を逮捕せんが爲に尼寺といふ尼寺を捜しに捜したに相違はない、けれども神樣は自ら自分を此處に隱してくだされた、此處にさへ居れば彼等は到底

自分を發見することは出來ぬ、斯う思うとユーフロシーンは、神の德を讃美せずには居られなかつた。

三年の間ユーフロシーンは僧房に在つて、專ら心を養ひ德を積むことを努めた、そして青年スマラグヅスの德操は僧院の內に異彩を放つもので有つて、誰一人として多少の影響を蒙らぬものとてはなかつた、和尙さんは遂にスマラグヅスに托するに接待掛を以てした、此青年僧侶の謹愼なる擧動は、來客の接待と敢えて僧院を犯さんとする女人の拒絕には此上もなき適切なるものと認めたからで有る、女は不淨なもので有る、其足跡さへも既に汚穢を傳播するもので有るとは和尙さんの口にする所で有つたからで有る。

さてスマラグヅスは僧院の接待掛として五年の星霜を送つた、處が或日の事で有る、見慣れぬ人が僧院を訪れて來た、まだ一見左程の年ではない、青年で有る、纏へる衣裳は壯麗を極めて、驕傲華奢の面影は有り〳〵と讀まるゝので有つたが、容顏憔悴として色青白く、眼光は絕えざる陰鬱の焰に燃えて誠に可憐なもので有つた。

青年は謂つた。

『御願でムいますが、和尙樣へ御眼に懸れる樣に御取計は出來ますまいか、私は甚しい苦痛の奴隸になつて居りますから、實は之を逃れさして頂きたいのでムいます』

サマラグヅスは、客を靜かに椅子に請じて、やがて和尙さんは

已に百十四歳に達して居て、老後の樂みにと先頃アンコライツ、アモン、オーシスス等の洞窟見物に出懸けて、只今不在なる旨を語つた。

客は之を聞いて椅子の上に其身を打ち沈め、顏に手を蔽うて落膽遣る瀨なきもの丶樣で有つた。

『ぢや最う癒る望はありやしない』

彼は斯うつぶやいて、やがて又其顏を擡げて謂つた。

『私が斯麼情ない態になつたのは、皆一人の女が戀しさからなんですよ』

ユーフロシーンは此時既に男のロンヂヌス伯で有ることを知つて居たので有るが、男も亦等しく自分を認むるに至らずや

と、之のみを深く心配するので有つた。彼女は直に安心して、やつれ果てたる男の姿を面のあたりに見て遂に同情の念に堪えぬので有つた。

久しき沈默の後にロンヂヌス伯は絶叫した。

『私は喜んで出家の身となつて、失望の境から脫れて見たいと思つて居るのです』

かくて彼は自分の戀をさらげ出して、許嫁のユーフロシーンが俄然として姿を隱した事から、八年の間心を籠めて搜しに搜した事、そして夫がとう〳〵見附からぬ悲しさ戀しさが身を喰ふて、やつれ衰へた果てが此通りだと語るので有つた。

女は此世の人ならぬ柔さしさを以て之に答へた。

『貴方が夫ほどまでにお望になつた此ユーフロシーンは、さばかり愛する價のあるものではムいませんでした、其美しさと申しても、貴方が御自分で抱いて居らつしやる理想を外にして見れば、夫ほどの貴といものでもムいませんでした、いや本當に悪く々しい賤しいものでムいました、其美は消えて無くなるものでムいました、そして殘つてる所を見ても殘念がる程の價の有るものでは有りませぬ、貴方はユーフロシーンが居なければ生きてることが出來ぬと仰有いますが、今若し貴方が其女にお出遇なさつても、迚もお分りにさへならぬ位かも知れませぬよ』

ロンヂヌス伯は之に對して一語をも答へなかへた、けれども此語或は此聲は彼が心に對して愉快なる印象を與へたので有

つた、彼は前よりも平靜な態度で、誓つて自分の家へ歸ると云つて僧院を辭し去つた。

彼は自分の家へ歸つた後で、世を捨てた僧門生活の願はしさに、聖僧オノフリウスに向つて其希望の容れられんことを乞ひ、莫大なる彼が資産の全部を此僧院に向つて喜捨したので有つた、伯の此行爲は實にユーフロシーンに對して大なる滿足を與へたので有つたが、此後暫時にして彼女の心は更に偉大なる喜悦に遭遇つたので有つた。

夫は斯うて有る、或日のこと一人の乞食が擔へる小嚢の重みに惱みつゝ身には僅かに汚なげなる襤褸を纏ふて僧院を訪れ、怪しげなる聲して一片の麵麥の施與を乞ふので有つた、ユーフ

ロシーンは直に其乞食の己が、父ロミユラスなることを認めた、女の心は躍るが樣て有つた、けれども其何者なるかを知らざるものゝ如き眞似して、ユーフロシーンは彼をして座して其足を洗はしめ、彼に食事を勸めたので有つた。

すると乞食は謂つた。

『神の御子樣、私は昔から御見掛け通りの文無し乞食じやなかつたのでムいます、嘗ては大變な財產も非常に生派な娘も有つて居ました、して其娘は至つて謹直で學者で、公けの試驗場へ出て甚麼六ヶ敷い謎でも問題でも直に解いて了う、一度なんざあ市からババイラスの花冠を貰つた程でムいます、夫に私は其娘を失くする、有つてる財產は凡て失くする、私は殘念て殘念て夫

が爲に骨身を嚙られてるのムいますよ、何だつて思ふて見ると、不思議な仕掛て拵へた鳥が眞物のやうに囀ると云ふ鳥の藪を有つて居た男が、今じやマント一枚さへ無いと云ふ身てムいますからね、けれども私は死ぬるまてに唯一眼て好いから、可愛い娘の顏さへ見りや、夫て充分慰めることが出來ますよ』

彼が此語を終るや否や、ユーフロシーンは老人の足下にがわと其身を投げて涙ながらに語るので有つた。

『お父樣、妾が其貴方の娘のユーフロシーンてムいますよ、ホラあの夜夜中に家から逃げ出しました娘てムいますよ、あの時は犬も吠えませんてした、お父樣お許し下さいませ、妾が斯う云ふことを致しましたのも、皆吾が主吾が神樣のお許しが有つての

事なんですから』

やがてユーフロシーンは、あの晩職人の假裝して逃げ出して此處へ來て以來、平和な年を送つて八年間の模樣を簡單に物語つた後に、自分の頸に在る目印を其父に示した、何だか狐につまれた樣で、何が何やら少しも分らなかつたロミユラスは、此目印を見て漸くに今互に語らへる人が其娘なることを承認したのて有る、而して彼は柔しく自分の娘を搔い抱きて嬉し涙にかき暮れつゝ、神の不思議なる行爲を且つ驚き且つ怪むのて有つた。

斯う云ふ理でロミユラスは自分も坊主になつて、神聖なるオノフリラスの僧院の中に起臥せんことを決心した。そしてオノ

フリウスに請うてロンヂヌス伯の隣りに自ら手を盡して草庵を營んだのて有る。

かくて彼等二人は一處に讃美歌も歌へば鋤鍬も手にした、休憩時間の折には二人は浮き世の愛の空にして我世の富の價なきことを互に語り合つた、けれどもロミユラスは自分が此所に來りて始めて其娘のユーフロシーンを認めた事をば決して何人にも語らなかつた、ロンヂヌス伯とオノフリウス僧正とが充分悟道に入り果てた後に於て、天國に於けるユーフロシーンが冒險の委曲を語らんことの却つて好都合なるべしと信じたからて有る、てロンヂヌスは自分の側に自分の許嫁の女のあることを決して知らなかつた、かくて數年の間三人は互に其德を積む

に努むるのて有つたが、遂に神の特別なる恩惠によりて三人共殆んど同時に永久の眠に就く事になつたのて有る、就中ロンヂヌス伯は最初の永眠者で有つた、ロミュラスは夫から二ヶ月を後れて死んだ、そして聖ユーフロシーンは瞑目の後丁度同じ週間に『來れ吾が家鳩』と謂つて基督によりて天に招かれたのて有つた、聖オノフリウスは其後百卅二歳を一期として神の子の出現後三百九十五年目のイースター祭の日、數多の功績を遺して三人の後を追馳たのて有つた、願うは大天使聖ミカエルの吾等の爲に天國案内の勞を取られんことを、聖ユーフロシーンの物語は是丈て有る、アーメン。

これは紀元七世紀から十四世紀頃の間にアゾス山上の寺院

にて書からたるジョージ牧師の物語て有る、けれども元來が極めて不確な事實て有るから自分も此については聊か狐疑する所ないでもない、夫は兎もあれ此物語は始めて世に公にされるものて有る、此點に關しては澤山に之を保證し得るの理由が有る、自分は今之を飜譯して世に公にするの價が充分有ると思ふこと、に就いても又等しく立派な理由を有つて居るのが嬉しい、原著には之より更に其飜譯の忠實なものて有ることから、同じ此物語がルフイヌスや聖トロームの作と必ずしも全然一致しないことに至るまて、二頁に近く述べてあるが、必要がないから省くことにする。

《をはり》

三、スコラスチカ

紀元四世紀の事である。

オーヴェルヌ市の一吏員の一人息子にインジュリオスと呼ぶ青年が有つた、彼は嘗てスコラスチカと謂ふ若い女に結婚を申込んだ、スコラスチカはインジュリオスと等しく一吏員の一人娘で有る、結婚の申込は首尾能く受納せられたそして結婚の儀式が滞りなく濟んだ後、男は自分の家へ花嫁を案内してやがて二人で寢室に入つた、すると花嫁は悲しげな顔付をして壁の方に向いてよいと許りに泣くので有つた。

『何だつて其麼に悲しいんです、ねえ、謂つて御覽なさい』

花婿はやがて女が泣き止むと又謂ひ添へた。

『神の御子の我が主、耶蘇基督の名によつて御願するから、よ、如何して其麼に悲しいんだか、其理を明瞭と謂つて下さい』

すると女は男の方に向き直つて謂つた——。

『若し妾が今から先一生の間毎日〳〵泣けるものなら、妾の胸に溢れて居る深い悲を癒すに足る丈の涙は今流さないてせう、妾は此纖弱い體を清淨無垢に保たう、さうして自分の潔白を表はすために此身を聖主基督に献げようと決心して居たのでムいますあゝ情けない！妾は自分で決心したものを成就ることが出來ない樣な風に見棄てられて了ひました！あゝ二度と妾の身に明日と云ふものが無ければよい！結婚のお土産として

妾を天國へ連れて行つて遣ると誓はれた天つ新郎から捨てられて了つて、人間の花嫁となる妾を、まあ見て下さいまし、不死の薔薇で持つて飾らるべき筈で有つた頭は、もう萎れかけた薔薇の花で飾つてある、いや寧ろ汚されて居りますよ、潔白の衣を着せらるべき筈で有つた體は、其代りに、汚らはしい打襪を着て居るのです、あゝ妾の一生の初めと終りとは何故に同じ樣で無いのでせうか、妾は生れてまだ唇が乳頭に觸らないうちに、死の門を潜つて居たら如何丈か仕合なことで有つたでせう、おゝ、そして妾の溫柔しい乳母が妾の柩を接吻して呉れるのだつたらば

なあ！貴方が兩手を妾の方にお述べになると世を救はうとして釘附けにされた手を思ひ出さずには居られません』

花嫁は斯う謂つて太く泣いた。

女を說諭する積りて男は答へた。

『ねゑ、スコラスチカ、私達の兩親はオーヴエルヌの町の中で金持て貴人の方だ、處で貴女も一人娘私も一人息子なのだ、お互の兩親は自分達の亡き後で、赤の他人が遺產を相續するが心細さに、兩家を繼續させるの手段として私達二人の結婚を希望したのだ』

けれども女は答へた。

『此世は無です、富も無です、此人生其物が已に無ですわ、死を待つこと以外に無意味なもの、それが〳〵人生ですか、盡きせぬ幸福の中に神の光に浴するものゝみが獨り永久に生きてるので、

神に仕へる天使の喜を知つて居るのですわ』

インジュリオスは此時神の惠を感じて絶叫した』

『おゝ美しい飾りのない詞！永久の生命の光は私の眼の上に光つて居る！ねゑ、スコラスチカ、若し貴女が自分の決心を堅く維持しやうと云ふ希望なら、私も貴女の側で處女の生活をやりませう。

すると稍、安心したと云ふよりも以上の態度で女は云つた、まだ涙ながらの眼には既に微笑の光が照つて居る。

『ねゑ貴方、此樣な望を女に許すのは男の方には六ケ敷い事ですわ、けれども若し貴方が妾達の希望を世間から汚されないで、成就することが出來る樣にして下されば、わが新郎わが主基督

が、妾に遣ると誓つて下すつた結婚土産の一部を貴方に差し上げませう』

やがて花婿は神に誓つて謂つた。

私は貴女の願を成し遂げませう』

かくて二人は其掌を重ね合つて互に樂しげに拍ちながら熟睡に陷つた。

其後二人は一つ寢臺に身を横へながら、互に清淨潔白の日を送るので有つたが、奮鬪十年の後スコラスチカは遂に死んで了つた。

當時の習慣によりて、盛裝せられたるスコラスチカの亡骸は顏を包まざるまゝに禮拜堂に送られた、全市民は讃美の歌を謠

はんが爲に框の後を追ふた。

イシジユリオススは亡き人の側に膝まづき、聲を擧げて謂つた。

『我主基督よ、我は、我が主が吾に力を與へ、能く吾をして、我が主の賓を傷けざらしめたるを深謝す』と。

死せるスコラスチカは此語を聞いて、框の床より立上つて微笑し、靜かに囁くので有つた。

『吾が友、御身はいかなれば何人も頼まざりしことを仰せ有るにや』

斯う謂つて女は永久の休みに就いた。

問もなくインジユリオススは女の後を追ふて行つた、人は聖

アリールの禮拜堂に於て、スコラスチカより程遠からぬ所に彼を埋めた、インジユリオススの埋葬せられた其夜、不可思議にも一本の薔薇は亡き花婿の墓より湧き上つて、見る間に生ひ繁り花咲き亂れて二つの墓を纏ふた、翌朝になつて人々は二つの墓の互に引結ばれたるを見て驚いた、此不思議な徵に依つて天の惠に浴せる兩人の潔白を認めた、オーヴエルヌの僧侶等は、此等の靈塲をば信者が尊敬の廟として祭つた。

されど其昔アリールとヂポチアンの二聖が傳道したる此州にも、此頃猶尠からぬ偶像禮拜者が居つた、其異教徒の一人シルヴヌスと云ふは、山野の女神に献げられたる泉を崇敬し、或は樫の古木の枝に祈願の繪畫を吊し、或は自分の爐邊には太陽と豐

僥の女神とを表はせる粘土製の數多の肖像を飾つて居つた、それから又彼が木の間隱れに設らへた庭園の神は、彼が花園を見下ろして居つた、斯うしてシルヴヌスは數多の牧歌や悲歌を作つて其晩年を作詩に耽つた、其詩は餘り流暢なものではなかつたが、さりとて全然未熟なものではなかつた、彼は其詩の中に出來得る限り古代詩人の作をも引用したので有つた、彼は亦世の一般の人々と共に純潔の一生を送つた花婿花嫁の墓を訪れて、二つの墓の上に生ひ繁れる薔薇を見て頗る驚歎の聲を發したので有るが、元來敬虔の念に富める彼は、此處にも天啓の一端を認め、此奇蹟を以て自分の信ずる諸神の力に歸し、そして其の薔薇をば、イロスの神の意志によりて繁茂したるものと信じて、決

して之を疑はなかつた。

そして彼は斯う謂つた、『誠の深いスコラスチカも、只空しき影たるに過ぎぬからには、今更ながら好機會の愛を失つた事と自ら快樂を棄てゝ顧みなかつたことを後悔して居るのだ女の體から生れて出た此等の薔薇は確かに女の思想を表はして居て、今猶生ける吾等に「戀ひ得る間に戀ひよ」と云ふことを語つて居る、此奇蹟は實に吾等に訓ふるに、人は時に及んで人生の快樂を味ふべきことを以てして居るのだ』

素朴なる偶像禮拜者は斯の樣に考へた、そして此問題に關して一片の悲歌を作つて居る、自分は甚だ偶然にも、タラスコンの公開圖書館に於て其詩が十一世紀頃の一聖書の表紙に記され

て居るのを發見した、目錄はミケル、チャスルス集 Fn 7439, 17° tis
として有る、久しく學者の眼に止らなかつた此貴重なる頁は八
十四頁以上より成り、恐らく四世紀頃より始まつたらうと云ふ
メロヴインヂヤン書風を以て記され、明かに之を讀むことが出
來るので有る、そして其文句は

今し悔は狂ひて汝は自ら拒みしものを求む

と云ふを以て始まり、

吾等は編むよ歎きの歌の頁を

と云ふを以て終つて居る、

自分は之が解釋を明にし終ると同時に、誓つて其全文を公に
せうと思ふ、そして自分は又レオポルド、デリスル君が自ら此貴

重なる文章をば、古文書研究所に贈らんとせらるべきを信じて
疑はない。

《をはり》

四、猶太の代官

(一)

リーリアス、ラシアは伊太利の或名家の息子で有つた、彼が哲學研究の爲に雅典の學校へ向けて家郷を辭したのは、日本で謂へばまだ肩上げの取れぬ時分で有つた、尋で彼は羅馬に其居を卜し、青年無賴漢の群に加はり、エスキリン河畔の自分の家に在りて日々放蕩三昧に其身を委ねたので有つた、處が其果は時の執政官の一人サルヒシウス、クイリヌスの妻レビダと、淺からぬ契を結んで其罪を問はれ、ダイベリウス、シーザーの爲に國外追放の身となつた、當時彼は將に二十四の齡を迎えんとする許で

有つたが、爾來放浪十八年の間シリア、パレスタイン、カパドシア、アーメニアを經て、アンチオック、シーザリア及ジエルサシム等を歷遊した、其後タイベリアスが死んでケイアスが王位に上ると同時に、ラミアは羅馬に歸ることを允され、其財產の一部の復權さへも許された、其間に於ける彼が困難は實に一通りではなかつたが、之か爲にまた少かぬ智識を得たので有つた。

羅馬に歸つて後は、ラミアは全く市民の妻女との交際を斷ち、少しも仕事を得やうとの心配もせず、所謂公けの名譽と云ふものに懸け離れて、エスキリンの自宅に閉居した、此處でラミアは遠國旅行の間に見聞した著しき事物を一々記述しながら、自ら語れるが如く、果敢なき後半生をば樂み多き餘生に變へたので

有る、斯る平安の業務の間に在りて、ラミアは亦傍ら孜々として
エピキュリアスの研究に從ひ、忍び寄る齡と共に、不安と驚駭の
念の交々迫り來るを覺ゆるのて有つた、やがて六十二の年を迎
へて病を得て少からぬ困難に陷るや、ベイーの海邊に再遊を試
みんと決心した、其昔は徒らに翡翠の俎徠に委せて在つた此地
方も、今は觀樂飽くことを知らぬ羅馬の富豪の獨占地と變つて
了つて居る、ラミアは獨り此華麗豪奢の群に交はりて、語らふ友
もなく淋しげに一週間を送るのて有つたが、一日晩餐の後、遊意
勃然として禁ずる能はず、葡萄の蔓の繁りに繁りて海上の展望
絶佳なる勾配を攀ぢ上つた。
勾配の頂上に達するや、彼は路傍のテレビン樹の蔭に腰を下

ろし、見渡す限り心地好げなる光景に飽かぬ眺望を擅にするの
て有つた、左には輝々として鉛色をなせるフレグクアの平原遠
くクメーの廢趾に展開し、右にはミセナムの岬角勿然として其
嘴をチレニアの海に投げて居る、瞰下ろせば脚下には壯麗なる
海岸に沿ひて贅澤なるベイーの市街あり、庭園到る處に散在し、
饅群の遊戯せる海の邊りには、銅像や廻廊や大理石の平塲を備
へたる別莊が群を爲して立つて居る、そして眼前灣を隔てゝカ
ンパニヤの海岸には遠くポシリッポーの丘上、魏然として聳ゆ
る堂塔伽藍が、落日の光に照されて粲として輝き、遙かに雲煙摸
糊の際には、ヴエスヴヰアスの靈山がほのかに笑ふんて居る。
ラミアは懷より『自然論』の卷物を取出し、自ら地上に腹這

ふて之を讀始めた、折しも奴隷の一隊の警衛の聲、高らかに輿を荷ふて荀荀畑の小路を辿りて上り來るに會し、ラミアは已むことを得ずして其身を起さねばならなかつた、輿には幕か垂てなかつた、ラミアは、即ち輿が近づくと同時に其中を窺ふた、中には甚だしく肥滿つた一人の貴人が、頭を片手に支へて物淋しげにしかも傲然として外を眺めて居るのであつた、紳士の高い鼻は甚しく曲つて居て、突出したる腮と、唇の邊りにて相接せん計りて有つて、顎骨は恐ろしく頑丈に見ゆるのて有つた。

ラミアは始めて紳士を見ると同時に、充分其顏に視覺えが有ると思つたが、其の姓名を想ひ出す事の出來ざるが儘に暫くは躊躇するのて有つた、やがて忽然として例の輿の方に進み寄つ

て其面に驚愕と喜悅の色を湛えて叫んだ。

『バイレート樣、二度と御目に懸りましたのは全く神樣のお蔭でムいます』

輿の中なる老人は、聲に應じて、手眞似て以て輿丁を止め、自分に呼び掛けた男の顏をつく〳〵と眺むるのて有つた、

『御主人バイレート殿、二十年許お出遇しなかつたので、頭は白くなる、頰は落ちる、ラミアの顏が最うお分りにならん程變りましたかなあ！』

ラミアの名を聞いて、ポンチウス・バイレートは齡相應な活潑な態度を以て、輿から步み出て、さも懷しげに再三再四ラミアの腕に懷き附いた。

『マア復と君に出遇ふなんて、一體什麼した約束なんだらう、けれども君は、僕が其昔シリアて、ジユデアの代官だつた時代の事を思ひ出すのが情けない、始めて君に出遇つたのは最う三十年も前の事だつたらう、あれはシーザリアだつたね、君が、漂浪生活に、疲れてやつて來たのは、ねえ君、僕は其時分可成に仕合の方で、聊か君の苦痛を慰めやうとする、ラミア君、君は友誼上から僕に從いてジエルサレムにやつて來る、僕はあの土地て猶太亞人に嫌はれて非道い眼に遇ふ、情けなかつたなあ、其から君は僕の客となり、友となり、十年以上一處に暮らして、互に羅馬の物語をしては、君は自分の不幸を、僕は一國の重荷を慰めやうとしたものだつたね君』

ラミアは改まつてバイレートの腕を取つた。

『まだ他に二つありますよ、貴方はヘロッド・アンチパスと一處になつて、私の爲に權力を振はれる、金は勝手に委して下さる、此二つの事實を忘れてるじやありませんか』

『君夫丈は止して呉れ給へ、君は羅馬へ歸つてから、使を遣して利子まて附けて其金は返へして呉れたんだもの』

『でも私は金丈拂つたからつて、借金が濟んだとは決して思はれない、ところて、如何てす御希望は成功しましたか、貴方は相當な幸福の享樂が出來ましたか、御家族や財産やお體等は如何てす』

『僕はシヽリーに隱居して、土地も有つてるので麥を作つて賣

つてるのだ、夫から僕の一番可愛い總領娘のポンチアなあ、あれが後家になつたので、歸つて家の世話をしてるんだ、有り難い事には僕の頭は相變らずで、記憶は少しも減らない、至極仕合せな事だけれども何分にも年を取つたので、何時も病身で悲は續く、此節は痛風で強く困つてるのだ、それで今フレグリアへ行つて何とか療治でもしやうと思つてるのだ、彼所では強い硫黄の氣が湧き出て、夜になると火が燃える、人の話によるとあの氣で以て痛が去れる、節々の硬いのか善く癒るさうだ、兎に角醫者がマアさうだと保證してるものだから』

『夫は〳〵何卒か甘く行けば善いですな、處で痛風で其麼お苦が有るにしても、貴方は全て私位にしか見えませんよ、本當は十

歳許り私より多いでせうがねえ、確かに貴方は非常に元氣が善くつて、私はこんなに嬉しい事はありません、ぢや貴方は定年前に御役目をお止しになつたのですか、ふッ？猶太の代官を止さないで、如何してシヽリーへ引込んで、自分自ら貶謫の身になられたのです、私が貴方の處を辭して以來の萬事が承りたいですが、貴方は私が馬や驢馬の殖産を行らうとして、カッバドシアへ出發する際に、丁度サマリアの一揆を征服せんとして居られたでせう、あの時から御眼に懸りませんでしたね、如何でした、彼の征服は？一つ承りませう、兎に角貴方に關係の有る事は何事によらず興味を感ずるですから』

ポンチウス、パイレートは悲しげに其頭を振つた。

『僕の氣質と職分の觀念とが、僕をして勤勉と熱心とを以て公けの責任を果さしたのだ、けれども僕は遂に殘忍なる憎惡心を起すに至つたと云ふのも外ではない、奸計讒謗相尋いて僕の經歷を最初から妨害し、そして實るべき結果が畵餅に歸して了つたからだ、君はサマリアの征服の事を尋ねられたが、マア此の丘へでも腰を掛けやうよ、あの事なら要するに一口二口で話は出來るが、思つて見ると彼の事件は實に昨日の事の樣に明瞭と僕の記憶に殘つて居る。

『元來あの事件はね、極めて人を說明するに妙を得た男が有つて――さう云ふ男は實はシリアには限りなく澤山居るのだが、――其男が或約束の下に、國內の聖地となつて居るゲリジムの

山上にサマリアの人民を招集したのだ、そして其昔イヴアンダー及吾等の祖先イーニアスの時代に、モーゼスと云ふ英傑、寧ろ此種族の神が有つて、其が隱して了つたと云ふ神聖な舟がある、此舟を見せてやると云ふのが其約束なのだ、サマリヤの人民は此保證の下に一揆を起したのだが、其時丁度彼等の準備が未だ出來ない內に討ち散らした方が宜からうと云ふ內應を得たので、僕は先づ二三小隊の步兵を送つて、彼の山を占領せよと命じて置いて、別に騎兵を遣つて、其附近で監視することにしたのだ、

『此等の深慮の手段は實に緊急なるもので有つた、一揆は既にゲリジム山麓のチラサバの町を圍みつゝ有つた、僕は容易に之を討散らして、出來た許りの烏合の衆を平げて了つた、それから

出來得る丈小數の犧牲で以て有力なる先例が示して置きたいために、僕は一撰の首領二三人丈に死刑の宣告を與へたけれどもラミア君、君も知つて居らるゝ通り、僕はシリアの知事がヴイテリウスには何れ丈困つたか知れやしない、何しろ彼の男は羅馬の爲てはない、寧ろ羅馬の利益に反してまで、帝國の諸州を其知事に貸附けることが出來ると思つてるのだもの、だからサマリアの顏利、連中は、僕に對する面當にヴイテリウスの處へ泣き附いたのだ、奴等の考つたら外にはない、只皇帝シーザーに從ひたくないと云ふ迄の事だ、處で彼等に一撰を起さす樣にしたのは僕だと云ふし、チラサバの町を圍んだのは全然僕の暴政に抵抗するのだと云ふのだから、ヴイテリウス先生早速奴等の不平

を聽取つて、ジユデアの事件は自分の友達のマーセルスに渡して了つて、僕に自分で皇帝に謁して此迄の行爲の是非を正せと云ふのだらう、僕は仕方がないから、痛恨悲歎の胸を抱へて船に乘つたさ、處が丁度僕が伊太利の海岸に著いた頃に、歳は取る國內の世話には疲れ切つて了つたシーザー皇帝、俄然として彼處に夕霧に隱れてボートとして見える、あのミセヌムの岬で崩御と來たのだらう、僕は已むを得ずして、後を繼がれたケイアス皇帝の裁決を乞ふたのだ、處で今度の皇帝はシリアの事件には通曉して居られる、聰明機敏の方と來て居るから、非常に好都合と思つて居たんだ、處がラミア君、不忠議な事には殘念ながら僕の敗北と決つたんだ、と云ふのは斯う云ふ理なのだ、當時ケイアス

皇帝には、アグリッパと云ふ猶太人の侍從が居た、此男は皇帝の小供の時からの友達で有つたので、皇帝は彼を自分の眼の樣に寵愛されたものだ、其處でヴイテリウスがアンチパスを敵とするに反して、アグリッパはヴイテリウスを愛する、同時にマンチパスを惡むと、斯うなつて來ては皇帝は偏見のみを容れて、僕の謂ふことには耳も貸されないのだ、僕は斯うして遂につまらない不幸の打擊の下に叩頭する外は無くなつた、其處で悲歎痛恨遣る瀨なくなつて了つて、シヽリーの僕の領地に隱退した、其時君最愛の娘が居て慰めて呉ても無つたらうものなら、僕は疾くに死んでるのだ、爾來僕は靜に麥を作つて、全島非常なる收穫を得て自ら慰めて居る、然し今では僕の一生は終つて了つたか

ら、ヴイデリウスと僕との間は未來が判斷して呉れるだらう」

ラミアは即ち之に答へた。

『左樣すると、貴方はサマリア人に對して、貴方の性質通りの正義を以て行動し、單に羅馬の利益のみを考へたと謂はれたやうですな、然し夫では貴方は、これまで常に貴方の身を動かし來つて居つた、猛烈なる勇氣の爲に彼麼つまらない事に對して動かされ過ぎたと云ふものではないですか、貴方もまだ覺えて居らるゝでせうが、お互にジユデアに居る時には、貴方よりもズツト若くつて一層猛烈で有るべき筈の私が、屢貴方に對して寬仁になさい溫和になさいと、強いて勸めた事が有るぢやないですか』

『ふッ！猶太人に對して溫和だつて！君は猶太人の間に住ん

て居た事が有りながら、夫ではまだ確に、彼のマア人類の敵を誤解してるのだ、高慢で卑劣で、お負けに頑鈍で恐ろしい下等で、君は愛想もこそも盡き果てた筈だ、ラミア君、僕の氣質は聖オーガスツスの格言から出來てるのだ、だから僕がジユデアの代官に任命されると同時に、世界は既に羅馬の平和と云ふ壯嚴なる理想で以て貫かれたのだ、從て帝國の危急存亡の秋に於けるが如く、吾等は最早知事の横暴の爲に、州の掠奪を徒らに見て居るを云ふ理で無くなつたのだ、僕は君、自分の職分の有る所を知つたさ、謹愼と中庸とで以て行動しやうと非常に注意をしたのだ、僕が溫和――、只溫和丈で行らうと決心した事は誓つて事實なんだ、處が君、僕の仁慈的の意志が何の益に立つたのだ、君も僕の側

に居て知つてらるゝ通り、僕の爲政者としての經歷の最初に第一の騷動が起つたらうじやないか、之に就いては何も詳しいことを云ふ必要はないさ、シーザリアからは守備兵を招いてジエルサレムで冬籠りをさせる、シーザー皇帝贈與の軍旗を樹てる、此まで皇帝の眞の尊嚴を解して居なかつたジエルサレムの住民は、從順を强迫せられると宛から人間よりも神に從ふのが少からず卑劣でゞも有る樣に、此に對して侮辱を感ずる、僧侶一同は役所へ押懸けて横柄な樣な謙遜な樣な態度で、神聖なる町の中から軍旗を撤回して呉れろと歎願する、僕は皇帝の神聖と帝國の威嚴の尊敬から之が同意を拒む、とう〳〵事は面倒になつて、一揆は僧侶と歩調を合せて、官邸の前へ集つて不穩なる歎願

的絶叫を發した、僕は即ちアントニアの塔の前へ兵隊を召集して鎗を立てさせ、更に警吏の樣に棍棒丈持たせて暴民の解散を命じたさ、けれども奴等は攻擊に對しには一向に無頓着で、盛に懇願を繼續した、中にも一層頑强なる連中は、自分からぶつ、仆れて咽喉を暴露し、故とサア殺して呉れろと云ふのだらう、ラミア君、君は彼の時の僕の溫和的態度は好く御存じだらう、處が夫で以て僕はシーザリアに印綬を返へせと强ひられたけれども其侮辱は少しも僕には相當して居なかつた、僕は神の前でも誓ふが決して自分の在職期間に於て、正義と法律を辱しむる樣な事はしなかつたのだ、然し僕も齡はとるし、僕を罵つた敵も皆死んで了つたから、最う復讐も見込はない、誰だし再び僕の人格を認

めて呉れるものもなからう』

斯う謂つて老人は歎聲を洩らして默つて了つた、ラミアは即ち答へたのである。

『未來の不確な事に對して望も抱かず、恐もしない人間は、眞面目な人間ですよ、人が今後の僕等に就いて如何な評價をしやうと一寸も關係ないでせう、僕等は遂に僕等自らの證人です、裁判官です、バイレートさん、貴方は自分で自分の正直な證據に依らなければならぬ、自尊と友人の尊敬とで滿足して居有しやい、世の中の人間は單に溫和丈では、政府の事業に對して滿足するものでない、夫から又其所作には人間の弱點を寛容すべき――哲學者は之を勸めて居るが――餘地が殆んど無いものですよ』

『今は最う何も云ふまい、フレグリアの野から出る硫黄の氣はまだ野が日光の勢で暖い間が勢ひが強いのだ、僕は急いで行かにや、左樣なら、けれど幸にも、一つ友達を二度發見したからには、此機に乘じて一層話がして見たい、ラミア君、明晩僕の家へ來て晩餐を一處にやりませぬか、僕の家はミセヌムの方向で、町の盡きた所の海岸に在る、門口を見れば直ぐわかるさ、門にはオルフユースの周圍に笛の音に聽き惚て居る虎と獅子の畫が有るから譯はないよ』

斯う謂つて更に『ては明日まて、――明日また猶太の話をしやうねゑ君』と附加へながら老人は再び輿に乘つた。

（二）

翌日晩餐の時刻になつて、ラミアはバイレートの家を訪ふた、二脚の椅子は正に用意して有つた、ペアフイコー（鳥）ツグミ、ルクライン湖の牡蠣及シヽリーの八つ目鰻等の料理が、丁重に而も質素に銀の皿に盛つて有つた、食事の間二人は長々と互の病苦と症候とを尋ね合ひ、更に自ら勸められたる種々の醫藥を語り合つたので有る、かくて二人は再び此地に邂逅せることを慶賀し、互に競ふて此海岸の絶景と氣候の溫和なること賞讃した、ラミアは金玉を飾り野蠻的刺繍の裾長き衣を纏ふて、屢此附近を徘徊せる媚婦等の美を頗る熱心を以て論じた、老代官は之に反

して、外國人及羅馬帝國の仇敵が、擬の寶石と羅の衣と云ふ虛飾によりて、羅馬の民を惑はすことを頻りに歎息したので有つた、やがて二人は此迄國内に於て成就されたる工學上の問題に話題を向け、ケイアスガ建設したプテオリーと、ベイー間の宏大な橋と、アヴエルヌヌ湖とルクラ・インン湖とを海に通ずる、オーガスツス開鑿の運河に關して相共に談じ合つた。

するとバイレートは歎聲を洩らしながら。

「僕も、僕も大に利益ある公共事業を設計したい希望て有つた、僕が罪の爲に猶太の代官に任命された時に、水道て以てジエルサレムの町に多量の良水を供給しやうと思つた、それて水準の高さや諸方の廣袤や、貯水池に對する諸方の傾斜の度合等、細密

に取調べて、萬事技師と相談て決めたのだ、そして監督規定を作つて個人の亂暴な掠奪的妨害を防ぐやうにした、技師も職工も之に從つた、其處で自分は令を傳へて工事に取掛ることを命じたのだ、處が元來が此計畫と云ふものは大きなアーチて以て、水は勿論健康までも此町へ導き入れやうと云ふので有るから、此創設は非常な滿足を以て迎へらるゝだらうと思ひの外、ジエルサレムの住民は反對に悲痛なる絶叫を洩らしたのだ、そして祥を爲して、瀆神と不信の罪とを鳴らかして大騷動をおつ初め、職工を製ふて土臺石をは撒いた、ラミア君、此にも增した野蠻的醜行が何處に在るだらうか、處がヴイテリウス先生奴等の肩を持つたらうじやないか、そして僕は事業中止の命令を受けたのだ

『が民の意志に反してまでも、一般の幸福の爲に事物を計畫することが、如何丈正當で有るかと云ふことは頗る難問ですなあ』

パイレート君の耳は宛がらラミアの言が入らなかつたらしい。

『水道が嫌なんて、全て狂氣の沙汰だ！けれど猶太人は、羅馬が元のものなら何でも厭がる、彼等の眼から見ると羅馬人は不潔の民で、それが猶太の國内に居るのは彼等に取りては神聖を瀆すもので有るらしい、君も覺えてる通りに、猶太の人間は決して代官の邸に入らうとしない、自ら汚るゝことを恐れてるのだ、從つて僕は、君が屢行つた事の有る彼の大理石の敷石の上で、野天裁判所を開いて代官の職權を振なければならなかつたのだ。

『猶太人は吾々羅馬人を恐れると同時に、又吾々を嫌つて居る、けれども、羅馬は其懷に抱かれて微笑む萬民の母で有り、又其保護者ではないか、鷲の國旗を先驅として、羅馬は平和と自由とを世界の隅々まで送り來つたので有つた、吾等は自ら從へた所の民を朋友として待遇し、此等の征服されたる民に許すに、彼等特有の習慣と法律とを以てする、否寧ろ彼等の爲に之を擁護するのだ、その昔群雄の割據で以て分裂して居たシリアは、ポンペイの軍隊に降服する迄に、嘗て平和と繁盛とを味ふと云ふことが出來たゞらうが、そして羅馬は好意の報酬として、此處に夥多の利益を占めやうとすれば、容易に之を占め得たので有つた、而も羅馬は、徒らに貪欲なる寺院の懷を肥やす所の貯蓄に向つて、少

しも手出しをしなかつたではないか、羅馬は果してペシヌスのシベレの靈廟モリメチや、シヽリアのジユピターの聖塲若しくはジエルサレムの猶太神の寺院などを荒らした事が有るか、シリアのアンチオーク、パルミラ、アパミア等の人民は、財産の安全に安じて、加之に沙漠を放浪するアラビア人の心配もなくなつて、羅馬の俊傑とシーザー皇帝の爲に寺院を建設した、而も猶太人のみは吾等を嫌ひ、吾等に抵抗する、彼等は强奪せらるゝまでは自分等の義務たる朝貢を肯じないで、陸軍に對しては頑强に抵抗するのだ』

『猶太人は深く其舊習に執着して居るのです、其麽な事が有らう道理もないと思ふが、彼等は屹度自分等の法律を廢せられ、習

慣を變ぜられでもしないかと、貴方を疑つたのだ、けれど貴方は、彼等の不幸な其麽誤つた思想を消すやうな風で以て、何時も何に事もやられなかつた、私が斯う謂つたとて怒つては不可ません、貴方は何時でも自制と云ふ事を考へて居られながら、彼等の恐怖心を弄ぶと云ふ事は貴方の好まるゝ所であつた、そして貴方が猶太人の信仰と宗教上の儀式とに對して、彼等の面前で輕侮の意を示さるゝのを私は一度ならず目擊した、貴方が殊の外彼等を怒らしたと云ふのは、僧徒の着物と高僧の裝飾品とは、アストニヤの塔内に藏つて、軍隊の力で警護すると云ふ令を傳へられた事です、猶太人が神聖なる事物を賞翫することは、到底羅馬人に及ぶべくもないが、それでも猶昔から尊敬され來つた儀

式は、充分に敬はれて居ると云ふことは、誰しも承認しなくちやならないでせう、』

ラミアが斯う答へると、バイレート老人はゾッとして肩を縮めた。

『猶太人は神の性質に就いては、殆んど正しい智識を有つて居ない、彼等はジユピターを禮拜するけれども、之に名を附け若しくは其銅像を建てることをしない、石の似顔を刻んで拜することは、亞細亞人普通の習慣で有るに係らず、彼等は夫さへもせぬ、アポロー、ネプチユーン、マース、ブルトーに就ても、如何なる女神に關しても何事も知らない、夫から昔の猶太人は、ヴイーナスをも禮拜した事は確かだ、と云ふのは今日に至るまでも、猶太の婦

人は犧牲として家鳩を祭壇に備へるからだ、そして君も善く知つてらるゝ通りに、家鳩の商人は寺の歩廊の下で、奉納の番の鳩を賣つて居る、僕が嘗て聞いた話によれば、或時狂人が出て來て、奉納の鳩の飼つてある小舍と持主とを刎ね倒さうとしたさうだ、僧侶等は此時凄まじい叫び聲を擧げて、之を以て瀆神の一例と認めたとやら、僕は家鳩を犧牲に供する習慣は、ヴイーナス神を禮拜の爲に起つたものだと思ふ、ラミア君、如何して君は笑つてるのです』

『私は如何してだかは知らないが、丁度今面白い事を思ひ附いたので笑つてるのです、私は猶太人の禮拜するジユピターの神が、何日かは羅馬へ來て、貴方に祟りはしないかと偶々思つて居

ました、其麼事が全然無いと如何して云へるでせうか、是迄既に非常に澤山な神樣が、亞細亞や阿弗利加から渡つて來たではないですか、アイシス神や犬の面をしたアヌビスと云ふやうな神を祭つた廟は、羅馬に建立せられたでせう、四辻や競馬場にも驢馬に乘つたシリアのボナデア神を見ることが出來るでせう、そしてタイベリウス皇帝治世の時分に、羅馬の一青年貴族が、埃及人の禮拜するジユピター・アンモンと號して、假面を被つて之に成り濟まし、至つて忠誠て有つて、神の言には到底逆ふことの出來なかつた有名な一貴婦人の愛を得た、と云ふ話をお聞さになつた事は無いですか、今後何日か猶太人のジユピター神が、オスチアの埠頭に上陸する事が無いとも限らぬから、貴方御用心な

さつたが善いでせう』

猶太人の神が羅馬へ來ると云ふ話を耳にした代官の眞面目な顏には、忽ち微笑が浮んだ、やがて彼は嚴かなる態度で答へたので有つた、

『猶太人は自國の神聖なる法律の解釋に關して、絶えず自ら騷動を演つて居るでないか、夫で居て其法律を國外の民に强ふることが如何して出來るだらうか、ラミア君、君は四辻で以て、猶太人が二十派に分裂して、手に手に割木を携へ、互に罵詈讒謗を極めたり、鬚を引張り合つたりするのを見たでせう、彼等がお寺の階段に立つて、其間に交つて氣狂の樣に預言的な事を得意に喋つて居る詰らない奴と一處に、痛歎の記だと謂つて各々自分の

汚ない着物を裂いてるのも見たてせう、彼等は猶世俗の人の知らない、不確なものと信ぜられて居る神に關して、色々な事柄を、平穏に而も公平に論じても差支ないと云ふことを決して知らなかつたと云ふのは、猶太人の神々の性質は、吾々には一寸も分らないし、知ることも出來ないからだ、それは僕だつて少からず神の攝理を信ずるのは大切な事と思つては居るのだ、が猶太人て云ふ奴には一體に哲學がないのみならず、色々の異つた意見と云ふものを許すことが出來ない人種だ、だから神聖な問題に關して、國法に反對の意見でも發表せうものなら、立ろに重刑に處せられて了ふのだ、そして猶太人に對する羅馬の勢力が強まつた以來は、猶太の法官が宣告した判決でも甚だ大切なものは、

知事か又は代官の許諾を經ないては之を實行する事が出來ないので、彼等は何時と云ふことなく、大急ぎて以て無慈悲なる宣告に對して羅馬の當局者の調印を求めるのだ、そして彼等は當局者の邸宅を包圍しては『殺せ殺せ』と絶叫するさうだ、貧乏人も金持も、凡て僧侶と相連合して、僕の象牙の椅子に向つて恐ろしい攻擊をやつて來て、着物の裾を攫み草履の紐を握つて、或る不幸な人に對し、死刑の宣告を許せ〳〵と迫られた事が僕も少くも數百度は有る、そして其人の罪と云ふのは何かと思ふと、僕には確かに認めることが出來ない、若し罪人にするとすれば原告同樣氣狂だと云ふより外はない人なのだ、此樣例は確かに數百度あつた、いや百度所の騒ぎじやない、毎日絶えずの事だ、け

れども彼等の法律を、宛から羅馬の法律同樣に實行するのは僕の職分で有つたと云ふのは僕が任命されたのは、猶太の法律を破壞する爲でなく、生殺與奪の權は委かされて居ると云ふものゝ、充分に彼等の習慣を保護する爲で有つたからで有る、僕は任命の當初は、道理に傾聽するやうに彼等を說伏せやうとした、彼等の犧牲を殺さない樣にせうと企てたけれども此溫和手段は却て益々彼等を怒らした、彼等は丁度翼をたゝき嘴を怒らして、猛々しい鷲のやうな勢で其餌を要めた、猶太の僧侶等は、僕が猶太の國法を蹂躙する旨を、シーザー皇帝に向つて訴へた、そして其告訴はヴイテリウスの助力によりて大に効果を奏し、其結果として僕は嚴しい譴責を蒙つた、希臘人の云ふ樣に、原告被告双

方共一處にして羅馬へ送つてやりたいと、僕は幾度思つたか知れやしない、

『ラミヤ君、斯う謂ふことを謂つた所で、僕は羅馬を籠絡して僕の平安を妨げた所の民に對して、敗北の恨を懷いたり、僕が老衰の怒を洩らすものだと思つて呉れ給ふな、之に反して、僕は早晩猶太人が、吾々羅馬人を逐拂らう樣な事になるだらうと、夫を心配してるのだ、吾々が彼等を支配することが出來ないからには、已むを得ず之を滅ぼすことに成るだらう、夫は最う決して疑ない事だ、彼等は平生から不服の有樣に有る上に、火の樣な思て以て叛人を養つて居るのだから、何日かは夫が恐ろしい勢――其勢に比べたら北阿のヌミヂア人の怒や、パーシア人の不平など

は全て小供の遊び事だらうが――其麼劇しい勢で以て、羅馬人に對して爆發するには相違ない事だ、彼等は密かに馬鹿氣た希望を抱いて、吾々の滅亡を豫想してるから可笑しい、何しろ神託を頼みにして、將來全世界を支配する國王が、猶太に生れると信じてるのだから、屹度反亂するに決つて居る、斯う云ふ國民だから箸にも匙にも懸りつこなしさ、そこでどうしても猶太人は討平げて了つて、ジエルサレムは根底から覆へして了はなければ駄目だ、僕は年は取つたが、僕の一生の間に、ジエルサレムの城壁は顚覆され、人家は燒かれて、住民は悉く殺戮の悲境に陷り、寺の跡には鹽を撒くと云ふ樣なことが萬一無いとも限らぬ、左樣なつた日にやとう〳〵僕のあかりは立つのだ、』

ラミアは最つと手柔しい調子に話を戻あうと努めたので有る、

『貴方の久しい恨と邪險な豫言とは、解するに六ケ敷い事はない、それから猶太人の性格に就て經驗された事は、成程少しも彼等の爲には成らぬ事だ、けれども私は趣味ある傍觀者として、ジエルサレムに住つて自由に猶太人と交際し、貴方の全く知られない野人の中に、猶或種類の隱れた德が具つてることを發見したです、私の遇つた猶太人は皆溫和で、其質朴な擧止と眞心のあることゝは、全てスパルタの立法者に關した詩話を思ひ出さずにや居られない位です、處が自ら正しいと信じた事を行つた彼の素朴な人間が、貴方の配下の兵にやられて、隨分澤山死んで了

つたじやないですか、斯う云ふ人間は吾々が輕蔑すべきものではないでせう、何も私は萬事中庸と公平とでやつて行きたいと思ふから斯う云ふのです、けれども白狀すれば、私は猶太人に對して生々した同情を經驗した事は全くありませぬ、が私は猶太の婦人は至極面白いと思つた、其時分私は若くはあるし、シリアの婦人は底から私の心を搔き亂した、あの赤味のある唇と云ひ、暗い所でキラ〳〵する柔しい眼と云ひ、眠たい樣な眼附と云ひ、心から私を溶かしたのです、彩りをしたり甘松香や沒藥の香に濕したあの體は、何となしに人を引きつける所が有つて、珍らしい心持の好いものでしたよ』

バイレートは此樣な賞讃の辭を耳にしては、殆んど耐えられ

ぬので有つた、

『僕は猶太の婦人の陷穽に陷る樣な男ではなかつた、そして其問題は君自分で開いたのだから、僕は決して君の行爲に贊成することは出來ぬ、君が其昔羅馬て執政官の妻君と一處に犯した罪に對して、僕は頗る君を不德な人だとは思つたが、其際充分に君を咎めなかつたのは、實は其當時、君がまだ重刑に苦しんで居る時分で有つたからだ、貴族の地位から見れば、結婚は君神聖な結合なんだ、羅馬の繁榮を支持する所の制度の一つなんだ、外國の婦人が奴隷と能く人の陷る樣な關係を結ぶと云ふのは、若し其目的が彼等の體を服從的の溫順な態度に馴らすと云ふのなら兎も角も、さもなくば殆んど益の無い事だらう、云はゞ君が町

中のヴイーナス――戀の女神に其身を捧げるなんて云ふのは、餘りに寛大に過ぎてたんだ、つまり僕の君を責めるのは、君が善良なる市民の義務として法則通りに結婚して、小供を設けなかつたと云ふ事に在るのだ、

けれども ラミアは最早老人の言に耳を寄せては居なかつた、彼は今 ファアルニア酒の杯を傾け盡して、獨り自分の眼に映ずる面影を追ふて微笑むので有つた、

やがて ラミアは暫く無言の後、極めて重々しい聲で語り出した、そして其聲の調子は段々と高くなつて來たので有つた、

『あのマア、シリアの女の弱々しい踊り方の優美さつたら如何です、私はジエルサレムで一人の婦人を知つて居ました、其女は

何時もムッとした狹くるしい部屋の中で、摩れ耗つて了つた敷物の上に坐つて、煙つたい小さな洋燈の側で、合せ金を叩いては腕を動かしてるのです、腰は弓形になり、頭は重々しい赤い髪の毛につらされて、後の方に落ちかゝつて、其眼には愉快と熱心と傷々しさと不平とが溢れて居る、其マア美しさつたら、クレオパトラをして、嫉妬の餘り顏色なからしむるもので有つたですな、私は其野蠻的な舞踏、其聲――聊か嗄がれては居たが、實に美いですな――何となしに人を引つける風丰、其夢寢の境にある態度――其女は絶えず斯う云ふ狀況の中に生きてる樣でした――私は斯んな所に惚れ込んで了ひましたよ、だから其女の行く處何處へでも追けて行つたのです、そして女を取り捲いてる兵

隊、魔術家、強奪者と云ふ樣な惡黨――堂摺連の中にも混つたものです、ところが或日、其女が姿を隱して了つて、爾來未だに眼つかりません、久しい間私は下等な遊び場も旅舍も探し廻つた、其女を見ずに暮らすのは實に希臘の酒の味を忘れるよりは六ケ敷かつたです、處が其後五六年經つて、偶然其女が、ガリレアの一青年魔術者の團隊に仲間入をしてると云ふ事を聞いた、其青年は耶蘇と云つてナザレから來たもので、何の事だか全く知らないが、何かの罪で以て磔刑に遇つたんですつて、貴方は其男の事を何か覺えて居らつしやるですかなあ』

老人は眉を寄せた、そして宛から記憶の奥底から何物をか探り出さんとする人の樣に、其手を額に當てゝ暫時無言の後に小

聲で謂つた、

『耶蘇？ナザレの耶蘇？如何も思ひ出せない樣だなあ！』

（をはり）

五、影供養

晴れ渡つた或夏の夕暮で有つた、

ニューヴイユ・ドーモンの聖ユーラリー教會の墓守と自分とは、白馬亭の涼み臺に腰を下ろして、互に古酒を傾け合つた、

丁度其日の朝のことで有る、墓守は充分の敬意を以て、一人の死人を其墓塲に葬つた、其屍骸は今は恨の露の涙に濡れた白無垢に包まれて、實に心地善げに平安の境に眠つて居るだらう、二人は丁度酒を飲みつゝ此死人の平安を祝して居たので有る、其間に墓守は次の樣な話をした、

『死んだ私の父は一生墓地の穴堀をやりました、何方かと云へ

ば氣樂な性質な方でしたが、墓地の仕事をするものは氣質が、快活になるつて能く云ふから、屹度此も仕事の結果なんでしたらう、斯う云ふ人には死ぬるッて云ふ事が一向恐くもなければ、又何とも思つて居ないのです、私だつて貴方、夜分墓塲の中へ入るのは、此處へ來ると一寸も變りはありませぬ、よしんば幽靈が出て來た所で、夫が爲少しも當惑する樣なことはしませぬ、何しろ幽靈だつて、私の樣な墓塲勤めをするものだと思つて了へばそれ迄ですからね、私は死人の癖も知つて居れば、氣質も知つてます、實に私は坊さんさへも知らない事を知つて居るのです、私が丁度見た丈けお話するとすると、貴方は屹度吃驚なさるでせう、けれども默つてると賢こくなると云ふし、それから又始終話好

てあつた私の父でさへ、自分で知つてる事の一割も話しはしませんでしたからね、だけど其代り同じ話を屢繰返しました、私の覺えてる丈でもカザリン・フオンテーンの話は、少くも百度位はやりましたよ、』

『カザリン・フオンテーンと云ふ女は、處女のお婆さんで有つた、父は小供の時から見て居たので、能く其顏を覺えて居ました、何しろ貧乏では有つたが、至極有名で評判の善い女で有つたから、今でも其の時分の評判を覺えてる人が老人の中に確か二三人は居るに違ない、お婆さんはオーノン街の角の、小塔の中に住つて居ました、あの塔はアースリン尼院の庭園を瞰下ろしてた昔の大屋敷の片割で、今でも其儘になつて居る、其塔の到る處に、ま

だ色々の肖像や、半ば消えかゝつた文字などが殘つて居ります、此間亡くなられた聖ユーラリーの和尚さんのレヴアシューと云ふ方が、其處に『愛は死よりも強い』と書いて有るが、『あれは神の愛のことだ』と云はれたことが有ります、

『カザリン・フオンテーンは、此小さい塔の中に住つて、レース作りを仕事にして居ました、御存じの通り此邊で出來たレースは、昔は世界最良とまで貴ばれたものです、處で誰もカザリンの親族とか、友達の事を知つたものは無くて、話によれば、お婆さんが丁度十八の時に、ドーモン・クレリーと云ふ若い騎士に戀して、密に二世の契を結んで居たと云ふ事で有る、けれども眞面目な人々は其話を信用しないで、夫は寧ろ誰かゝ作つた話に過ぎない、

其證據には、カザリンの擧動と云ふものは、單に女の働き人と云ふよりも、貴婦人的で有る、のみならず白髮のカザリンの顏に、未だ非常な美が殘つて居る、之が貞淑な女の證據であると謂つて居ました、それは兎に角、カザリンの容貌は一體に悲哀を帶びて、其指には、兩手を組合せた形に拵へた指輪が一つ嵌つて居ました、昔は許嫁の儀式の時に、斯う謂ふ風の指輪を取り交はすのが一般の習慣で有つたですねえ、貴方も確か其は御存知でせう、

『カザリンは神人の樣な生活をして、多くは敎會で其日を送り、雨が降らうと鎗が降らうと、天氣の如何に係らず、每朝聖ユーリー寺へ行つては、六時の供養の手傳をして居たのです、

『さて師走の或晩のこと、カザリンが自分の部屋へ寢て居ると、

チャン〳〵と云ふ鐘の音がする、眼が覺めると同時に、之は始めの供養の鐘だなと思つた信心なカザリンは、直に飛起きて着物を着換へて、二階から降りて街道へ出た、外は未だ眞暗で、空も暗澹として星の光さへない、加之四邊は閒然として、犬の遠吠さへも聞えず、全く生物の世界を懸け離れて了つたやうな感じがするのでしたけれどもカザリンは、路々の敗石の一つ〳〵迄を熟知して居て、目閉りても容易に歩ける位なので、やがて苦もなくオーノン街と、ドラ・バロアス街との角に達したのです、此處にはジエスの樹が生ひ茂つて、ユーラリー敎會の屋根を蔽ふて居る、カザリンが此處へ行つた時には、敎會の雨戸は悉く開放いて、中からは大きな蠟燭の光が照り輝いて居つた、カザリンが門の中

へ入ると、堂内に溢れんばかりの聽衆が、直にカザリンの周圍に集つたけれども會衆の誰一人として祈禱を捧げて居るものはない、殊に不思議な事には、其處に居る人々は、錦、緞子か天鵞絨の着物を着て居て、羽の附いた帽子を冠り、夫にまだ昔風に、腰には劍を吊つて居る、金の頭の附いた杖を携へた紳士も居れば、コロネット形の櫛の喰付いたレース帽を冠つた貴夫人も居る、此等の貴夫人は飾り立てた顏を扇に隱して、白粉を塗つた額と眼の角の方を少しばかり見せて居る、聖ルイ勳章付の騎士の連中が其手を延して貴夫人連と驩を交へて居る、其中に一同は少しの音もさせないで、自分の席を占めやうとして動き出した、けれども敷石の上には何の足音も起らねば、衣の摩れ合ふ音も

聞えぬ、少しく低まつた方には、鳶色のジャケツと、縞の袴と、青い履下とを着けた職工の連中が寄つて集つて、美人の腰に腕を周して立つて居る、抱かれた若い娘等は恥しさうに、顏を赤くして下向いて居る、淨水盤の側には、紅の袴とレースの胸當を着た百姓の女が、犬か猫かの樣にドッシりと地べたに尻を据えて居て、若い男は其後ろに坐つて、大きな眼を開けて睨みつめて、指の上に帽子を載つけて頻りに夫を爪繰り廻して居る、好く見ると此等の默つた連中は、皆柔しい悲しい同じ樣な思で集つて居るのてした、カザリンは此時常日の場所に膝づいて居て、和尙さんが二人の番僧に尾いて拜壇の方に進むのを見た、けれども和尙さんの顏も番僧の顏も充分に認める事が出來なかつた、供養が始

まつたけれども、誰の唇も動くばかりて聲は洩れぬ、鐘はぶるぶると震へるが、鐘の音は聞えぬ、供養は全く默禱て有る、偶カザリンは、自分の隣に居る不思議な人に見守られて居る樣な氣がして、頭を斜にして密かに隣の方を見ると、不思議！不思議！其昔自分の戀人て有つて、五十四年間と云ふもの、全く死んて居た青年騎士ドーモン・クレリーが其處に居るので有る、カザリンは男の左の耳、の上にあつた小さい印と、其頰の上に映る長い黑い睫毛の影に由つて左樣だと覺つたのてす、男は赤色の金の小綠の着いた獵服を着けて居た、其獵服こそは、其昔彼が聖レオナードの森て、カザリンに出遇つて、渴いて水が欲しいと云つて密かにカザリンを接吻した時分に着て居たと同じ服て有る、そして男

は少しも年が寄らないで、今も昔も變らぬ若々しい立派な顏付て有つて、笑へば今も素晴しい立派な齒が見えるのて有る、カザリンは聲を細めて男に謂つたのてす、

「もしドーモンさん、妾は其昔女の一番貴いとして居るものを、皆貴方に差しあげたカザリンてす、御身に對して神樣の御惠を御祈り致します、夫と同時に、妾が貴力に身を任せて犯した罪に對して、何日かは神樣が後悔させて下されば善いと思つて居ります、夫と云ふのも、妾は最う髮も白くなつて、遠からず死ぬることてせうが、未だ貴方を愛したと云ふことを本當に後悔するに至らないからてすよ、然し慕しの君よ、貴い君よ、彼麼に古風な着物を着て玆に默禱をして居る人達は一體誰なのてす、ゑッ？」

『男は息よりも遙に弱い、而も瞭然した聲で之に答へたのです、

「カザリンさん、此連中はね、皆冥土から來た靈なんだよ、元々戀の罪を犯した私等のやうに、罪を犯して神樣を惱ましたものだが、其實私共と同じことに、故と罪を犯したのではないのだから、仕合なことには未だ神樣から見放されないのでさあ、

「浮世の戀人から引離されて、冥土の淨火で清めを受ける間に、彼等は一番殘酷な刑罰の苦を受けるのだ、天使でさへも彼等の戀の苦痛には同情を寄せる程で有る、そこで天使は神の許を受けて、毎晩一時間宛互の戀人をお寺で引合せ、手に手を取つて影供養に列することが出來る樣にするのだ、此は本當ですよ、だから私が未だ死んでない貴女に過へたのは、本當に神樣の特別の

御許しなんですよ、」

『するとカザリンは之に答へた、

「妾もね森の中で貴方に接吻を任せた時の美人に立返へれるものなら、何時でも喜んで死んで貴方の側へ行きたいわ、」

『息を殺して二人が斯麽話をしてる間に、極年の寄つた一人の坊さんが、大きな銅鉢を聽衆の前に突きつけては喜捨金の拾ひ集めをやつて居た、銅鉢を目の前に突きつけられたものは、久しい間通用しなかつたエクー、プロリン、ヂユカー、ヂユカツーン、ジヤコブス、ローズノーブルと云ふ樣な古錢を、順番に銅鉢の中へ投込む、けれど投げた金は音もしないで靜に底へ落ちて了ふ、とう〳〵ドーモンの前へ順番が廻つて來た時に、彼は一ルイを其

中へ投げ込んだが音は矢張少しもしない、

『やかて老僧はカザリンの前へやつて來たのです、するとカザリンは一生懸命になつて、衣嚢と云ふ衣嚢を血眼になつて、捜しに捜したが一文も見つからぬ、仕方なしにカザリンは、とう〳〵ドーモンが死ぬる前の日に指へ嵌めて呉れた指輪を取つて、銅鉢の中へ入れた、處が金の指輪が中へ落ち込むと同時に、鐘の音のやうなゴーンと云ふ重々しい音が起つた、其響に驚いてか、ドーモンも老僧も和尚も番僧も貴夫人も騎士の連中も、集つてるものが悉く掻き消すが如くに失せて了つた、夫と同時に、照り輝いて居た蠟燭がトロ〳〵ッと流れて了つて、カザリン・フォンテーンは獨りで眞暗闇の中に殘されたのでした、

* * * * * *

斯う云ふ風に話を終つた墓守は、グイと一杯引かけて暫く考へて居たが、やがて、又其話を續けて謂つた、

『私は、丁度此話を父から繰返し〳〵聞いた通りに話したのですが、私は斯う云ふ事は本當だらうと思ふ、と云ふのは、死んだ人に獨特な風習に就て、私が觀察した所と萬事一致してるからです、私は小供の時から、隨分澤山な死人と附合つたから知つてるが、死人と云ふものは自分の好きなものに好く歸つて來るものですよ、

『吝嗇坊が死ぬると、生きてる中に隱して置いた寶物の近所へ、夜夜中辻路附に出ると云ふのは此理だ、そして嚴重に金の番を

するが、其心配が、爲になる所か却て不爲になる、けれども穴を堀つて、自分の埋めて置いた金を搜しに來ることは時々あることです、此と同じことに、死んだ夫か、後に遺つて二度と結婚した自分の妻を、毎晩困らせに來ると云ふことも事實だ、既に私は、自分の生きてた時よりも死んでからの方が、餘計に自分の妻の番をしてるものを五六人も知つてるんです、

『私は左樣云ふ事は充分惡い事だと思ひますよ、何故だつて、死んだ人間は決して嫉妬なんて燒くべきものじやないですから、然し私は自分で見た丈の事を話すんですぜ、それにしても寡婦と結婚するのは一寸考へものだと思ふ、加之今話した話なんざあ、とう〳〵大變な事になつちやつたんですからね、

『左樣だ、其翌朝のことだ、カザリンは自分の部屋でチャンと死いて居たんです、そしてユーラリー寺の小使が例の銅鉢を見たら、兩手を組合せた形に拵へた指輪か一つ其中に有つたんですとさ、加之私は冗戯を云ふ樣な人間じやないから、ねる、最う一本跳へませうか……』

（をはり）

六、レスリー・ウッド

ブールヴアー・マルシャーブに於けるN夫人の歡迎會には、音樂の演奏も素人芝居も有つた、

前庭の方には、綺羅を着飾つた婦人の周圍に、青年連が烈しい臭氣にむせびつゝ有つたが、吾々老人連は、聊か不平なきにも非ずして、其間小さい客間の中に靜かに頭を冷やして居つた、此處からは何物も見えないで、只レゼーン孃の歌ふ聲のみは、蜻蛉の羽音の樣に微かに聞ゆるので有つた、そして時々蒸し熱い室の中から起る哄笑と讃歎の聲とを聞いて、吾等は自ら與からざる御馳走に對して、聊か我慢をするので有つた、かくて我等一同が

心地よげに愉快なる雜談に耽つて居る折しも、其中の一人なるB君と云ふ愛嬌のある歡迎委員が謂つた、

『諸君はウードが此處に居たのを御存知でしたか』

之に對して手ん手に交る〳〵絶叫した、

『ウード？レスリー・ウードが？其麼事は無い筈だ、あの男が巴里に見えなくなつてから最う十年にもなる、彼の男が如何なつたかは誰も知らないんだもの』

『ヴイクトリア・ニヤンザの海岸に、黑人共和國を建てたと云ふ話が有る』

『斯う謂ふ話も有る、勿論君等の知つてる通りに、先生素晴しい金滿家だし、六ヶ敷い事を行るには、並の人間の眞似の出來ぬ男

だらう、處で今じや錫蘭に行つて、バヤデールと云ふ印度の踊ッ子が、夜晝踊つてる立派な庭園の中に、美しい宮殿を建てゝ住んでると云ふ事だ、』

『そんな譫語を誰が本當にするものか、本當の話が、聖書と馬上銃とを提げてズルス人改宗と出かけたさうだ』

B君は此時調子を低うして話を遮つた、

『あこに居るよ彼所に、見えるかね？』

斯う謂つて彼は頭と眼とを少しく動かして、入口に倚りかゝつて立つてる人に眼を附けさせた、男は飛拔けて丈の高い方で、頭は其前に亂れて居る群集を遙かに擺てゝ居る、見ると舞臺に氣を奪はれて居るらしい、

其丈夫相な風采と、白い頰髭の生えた赤味のある顏と、鋭敏な眼と穩かな注目とは、如何してもレスリー・ウッドより外の人て有るとは思へなかつた、

十年間彼が『世界』新聞に寄稿した、眞似の出來ない書簡を思ひ出して、自分はB君に謂つた、

『彼の男は現代第一等の新聞記者だ』

『或は左樣かも知らぬ、兎に角に、僕は過去二十年以來、レスリー・ウッドの樣な歐州と云ふものを完全に知つて居たものは、外には一人もないと云ひたい、』

B君が斯う云ふと、モイゼ男爵は頭を振つて之に繼いだ、

『君等は眞のウッドを知らないのだ、知つてるのは僕丈だらう、

彼の男は第一財政家だ、僕の知つてる所では、誰よりも相場が一番甘いんだ、何をお笑ひです？公主！」

長椅子の上に優然と身をもたせて、卷煙草を喫かすことの出來ぬ退窟さに、ゼヴォリン公主はニヤリ〳〵笑つて居た、

『貴方方は何方もウッドさんが解らんのだ、何方も！彼の人は絶えず神秘家で戀の奴隷ですわ、決してそれより他の者じや有りませんよ、』

公主の此言に對してモイゼ男は答へた、

『私は其にや同意は出來ぬ、けれど私は此奴め、一生の中一番大切な十年間を如何して居たか知りたいんだ』

『一生の中で一番大切な十年て云ふと、何時頃の事なんです？』

『五十から六十の間さ、人間の地位は其間に出來るんだ、處が彼の男は自分の一生を慰む以外にする事何にもなしだ』

『男爵、夫は本人に尋ねて見たら好いでせう、彼の人今此方へ來てますよ』

丁度此時重い體が落ちた樣な、戸板を擲く樣な烈しい調子の喝采が起つて、餘興の終が傳へられたので有つた、すると黑衣の牧師連が、前庭の方から小さい客間の中に溢れ込んだ、そして夫婦連の連中が、食堂の方へ去つて了うと、レスリー・ウッドは吾々の方へ近寄つて來た、

彼は極めて丁重に親しげな握手をすると、

『お化け！お化け！』

とモイゼ男爵は絶叫した、

『ハヽ、本當の遠い所からなら、人間もなか〳〵歸れませぬよ、思つて見ると世界は小さいものです』

とウッドが之に答へる、

『ウッド君、君は先程から公主の謂つとられることは御存じかね？君が神秘家に過ぎんと云ふことを謂つとられるが、矢張夫が本當ですかな？』

『夫や神秘家と云ふ君方の考に依りけりですさあ』

『言葉は文字通りて明かなものさ、神秘家と云やあ來世の事柄に關はる人の事だね、處て君あ現世の事柄に餘りに明るぎて、迚も來世の事なんぞに心配することの出來ぬ人だらう』

此言葉を聞いてウッドは咿、か其眉を顰めたのて有る、

『モイゼ君、君は全て間違つてる、來世の事は此吾々が今住んてる現世の事よりズート〳〵大切なものだよ、モイゼ君』

すると男爵は

『什麽したんだ、此立派なウッドとも謂はれる人が、本當に頓智家だ！』

と絶叫して嘲笑つて見る、

と、公主は極めて眞面目に

『ウッドさん、貴方は頓智家でないと仰有い、妾は頓智家が大嫌てすよ』

と云つて、立上つて更に謂つた、

『ウッドさん食堂の方へお連れ下さるてせうか』

* * * * * * *

夫から一時間許の後、G君が得意の唱歌を以て聽衆を惱殺して居る折しも、私は人なき食堂の前に於て再びレスター・ウッドとゼヴオリン公主とに出遇つた、

公主は殆んど無限の熱情を以て、自分の友達たるトルストイ伯に就て語りつゝ有つた、そして自分の階級を去つて其身を平民に伍し、平民の心を以て平民の衣を身に纏い、文藝の傑作に從ひつゝ有つた其手を下して、貧民の爲に靴の製造に從事すると云ふ伯の近況を物語りつゝ有つた、

處が私は此際非常に驚いた事か有る、外でもない、此時ウッド

が、其の樣な全然常識に反した一種の生活に對して、讃歎の意を表しつゝ有つたからで有る、彼は喘息の初期が一種特有な柔さしさを添へた聊かゼイ〳〵云ふ聲て謂つた、

『左樣、杜翁及正しい其哲學の全部は「神よ御意、志を成就させ給へ」と云ふ語句の中に含まれて居るです、人間の不幸と云ふ不幸は、神の意志から全く懸け離れた樣な人間の意志を行ふの結果だと、翁は謂つて居るが、翁は今夫を實現したのだ、其程の高貴な學說を、空想的な法外な景物を添へて、臺なしにして了はにや好いがと云ふことが只私の心配ですよ』

公主は、聊か躊躇しながら聲を低めて謂つた、

『伯爵の說は或點が至つて法外な丈ですわ、良人の權利義務の

範圍を其生活の非常に進歩した時代に對して說く事と、其樣な時代の聖人に課するに昔の祖宗の老年を以てすると云ふ事が即ち法外てすよ』

自ら漸く年老ひたるウッドは、殊更に聲を低うして之に答へた、

『そして夫が復絕好な事て、非常に神聖なものとさへ云ふべきことだ、生理的自然的の愛と云ふものは、神の創つた萬物に適應なものて有つて、其中に爭鬪も動搖も無い間は、其處に神的素朴とか聖的肉慾と云ふものが有るので、夫が無ければ、亦救濟と云ふことが無い譯だ、て禁慾主義と云ふのは虛傲な反逆的なものに過ぎぬのて有る、だから吾々は、神人ボーヅの樣な先例を絕え

ず心に銘して、聖書は愛と云ふものは老年のパンて有るを說いて居ると云ふことを忘れてはならぬと思ふ』

やがて彼は、俄然として光明に浴し喜悅に驅られ、身心共に現世の人に非るものゝ如くなりて、眼を擧げ腕を擴げ、其全心を捧げて何者か或る見えざるものゝ發願を祈りながら小聲に言ふのて有つた、

『アニー！アニー！吾が最愛のアニーさん！神樣は神人が未だ下界の人て有る間に、互に相親み相愛し、例へ禽獸と雖も之を愛することを願つて居られるのは本當だ、ねえ、左樣じやないですか？』

彼は斯う謂ひ終つて疲れ果てゝ肱椅子の中に倒れ込んて了

つた、烈しく息を吸ふと廣い胸がぶるッと震へた、そして此處境遇に在つても、猶其容貌は以前よりも快活の氣に溢れて、例へば運轉が止んで、却て恐しく思はれる機械の樣であつた、ゼヴオリン公主は少しも驚いた樣子なく、半布で以て彼か額を拭ふてコップの水を飲ましてやつた、

私は驚いて爲す所を知らなかつた、そして此天眼通の態度を見て、什麼しても此男が、書齋の内で國會刊行書の中に座つて、非常なる慧眼を以て東洋問題や、ランクフルト條約や、金融市場に於ける危機などに關して、數多度自分と談話を交へた人だとは思へなかつた、私が不安心で堪らぬと云ふことを公主に話すと、公主は兩方の肩を縮めて謂つた、

『貴方が佛人であると云ふことを知るのは樂なことですよ！貴方は誰でも自分の思ふ通りの考を持つてない人を、氣狂にして了はうとなさる、心配には及びませぬわ、ウッドさんは立派に正氣の人で、決して氣なんぞ狂つて居やしませんよ、サア唱歌でも聞きに參りませう、ねえ、』

私は大客間の方へ公主を案内して行つた後で、丁度辭して歸らうとする時玄關でウッド君が外套を着て居るのを見た、先程倒れた後の結果は、何の支りにもならぬかつたらしい、

彼は私を見ると謂つた

『おい君、君は僕の近所に居るらしい、君はまだマラケー波止場に居るんだらう、僕はサン・ペール街の宿屋に居るんだ、此麼好い

天氣の時には徒歩のも面白いよ、君厭でなきあ一處に歩いて歸りながら話さうか、』

私は直に之に同意した、入口で彼は葉卷を一本呉れて、そして懐中電燈を出して火を點けさせた、

『此奴は至つて便利だよ』

と云つて、やがて彼は極めて明瞭に之が原理を説明し始めた、

私は再び昔しながらのウッドを認めたのである、斯うして二人は色々の問題に就いて互に喋りながら數百歩許り歩いた、と、彼は俄然其手を靜かに私の肩に載けて語り出したのである、

『君！今晩僕の謂つた事の中には、確かに君の驚いたことが有るだらう、大方君、其説明が聞きたいだらう』

『僕は非常に面白かつた、ウッド君、是非一つ聞かして呉給へ、』

『宜し、僕は喜んで話さう、一體僕は君の性格を非常に讃歎してるのだ、勿論僕等二人は、同じ見解から人生を考へることは出來ぬかも知れぬ、が然し、君は新しいからと云つて思想を排斥する樣な人じやない、そして夫が充分に珍らしい性質で、佛蘭西では殊に左樣なのだ、』

『けれどもウッド君、僕は思想の自由の爲に左樣思ふんだが—』

『否、否、君は英人の樣に神學者肌の人じやない、けれども夫は夫て好いとして、僕は自分の自信の歴史に就いて出來る丈簡單に君に話して見たい、十五年前に君が僕を知つた時には、僕は倫敦『世界』の通信員だつた、新聞事業と云ふものは僕等には可成有

益な職業で、君なんぞの仕事よりか、最つと尊敬を受けてるものだ、それに僕の地位は結構なもので、夫から出來得る丈の大變な利益を收め得たと思ふ、そして僕は事業には慣れて居るしするから、或る極めて有益な事を行つて、二三年の間に、勢力と富と此二つの欲しいものを得て了つた、僕が實際的の人間だと云ふことは君も知つてるだらう

『爾來僕は決して自分の見解に終局の目的なくして仕事はしなかつた、要するに人生の最高の目的に達しやうとするのが僕の希望で有つた、處が自分の若い時に企てゝ可成に勞力を費した事から考へて、其最高目的と云ふものは、此下界生活の範圍外に在るものだと信じた、然しまだ僕は之に達するの實際手段

に關して疑を懷いて居つた、其結果僕は恐ろしい煩悶をしたよ、不確實と云ふことは僕の性質のやうな人間には絶對に堪ふることの出來ぬ事だからね、

『斯う云ふ風に考へて、僕は學士會院中の最も有名なる一員サー・ウイリアム・クルックの心理的研究に眞面目に注意することにした、僕はあの人を親しく知つて居たから、彼が學者で有ると同時に紳士で有ると云ふことを確むる必要はなかつた、其人は丁度其際或る若い女を研究して居つた、其女と云つたら實に不思議なもので、全然他に類例のない心力を有つて居たんだ、そしてクルック氏は、幸にも昔の靈魂の樣に、全然肉體から脱離した精神を充分に喚起することが出來たんだ、

『其面白い女と云ふのは、浮き世の生活を經驗して了つて、當時來世の生活をやつて居た女で、自ら其身を有名なる唯神論者たるクルック氏の實驗に貸して、禮儀を亂らない範圍に於ては、彼が要むる如何なる試驗にも身を委せて居たのだ、地上の存在が地上外の存在に接する點に關して、斯う云ふ樣な研究を積むと云ふことは、一歩〳〵進んで行つたならば、要するに最も知らざるべからざるもの即人生の眞の目的と云ふものを發見することが出來るだらうと僕は思つた、けれど僕は間もなく失望した、それは外でもない僕の尊敬せる人の研究は、其以上を望むも無理と云ふ程の精密なもので有つたに係らず、結局充分歴然たる神學的並に道德的自信と云ふものを得ることが出來なかつた

から、だ、

『其上クルック氏は、久しく自分の唯神論の會合に、度々喜んで同伴して呉れた彼の無類の婦人ね、彼から不意に共同を拒絶されたのだ、

『社會の不信に失望し同盟者の依りなさに憤激して、彼は自分の心理的經驗に關する有ゆる報告を止めて了つた、其處で僕は困つて了つて、事情を牧師B君に通じてやつた、

『此B君と云ふのは、曾く傳道師として南阿に行つてた男で、其處で昔の英國に眞に貴重な秩序ある熱心な態度で働いて居たので、其人が南阿から歸つてから僕は親しくなつたんだ、そして爾來僕に對しては、誰よりも絶えず勢力を有し、僕を左右して居

たのだ、

『ぢや大變賢こいんだな、左樣だらう』

と私が尋ねると、ウッドは

『教義上の知識は非常に深いさ、が、夫よりもあらいのは、彼の人が強い人格を有つてると云ふことだ、君も御承知の通、人を動かす力の中で、人格の力ほど強いものはないからね、處で僕の不幸は少しも彼を驚かすには足らなかつた、彼は僕の不幸を方法の缺點、要するに僕が此際に於ける憐むべき道德上の弱點に歸したのだ、

『そして彼は斯う謂つた、「科學上の實驗は決して科學の範圍以外に於て發見と云ふものを爲し得べきものではない、君にし

て此が解らぬと云ふのは什麼したのだ、ウッド君、君は此迄不思議にも不注意且輕卒て有つた、使徒パウルは、靈魂は萬物を求むると云ふことを語られた、若し吾々が精神上の眞理を發見したいと思ふならば、亦精神的の行路を立脚地としなければならない」

『此言葉は僕に對して非常に感動を與へたさ、

其處て僕は問いて見た、

『ぢや君、如何したら其精神的行路に入れるだらう』

すると B君は答へた、

『貧乏と質朴と云ふものが君の案内者にならなければならぬ、て、先づ君の財産を賣拂つて其所得金を貧民に遣り給へ、すると

君の名が高くなる、それを君は自ら隠れて、神に祈つて慈善事業に身を委ね、そして素朴の精神を懐いて潔白なる人となり給へ、すると君は眞理に達することが出來る、」

『僕は此處で此教訓を文字通りに守ることに決心した、直に手紙を出して、『世界』の通信員を辭した、それから、僕は大部分商賣上の計畫に投じて有つた資本を回收することにした、そしてアナニアスやサフアイラの樣な轍を覆んで、罪を犯すと云ふのも詰らぬことだと思つたから、最早自分のものでは無いと知りつゝも、資本の一錢でも失はぬと云ふ樣な風に、極めて柔さしい方法を取つた、夫から僕の談判に注目して居つたモイゼ男爵は僕の財政上の天才は、殆んど宗教の尊敬と代つて了ふものだと

思つて居た位だ、斯う云ふ風て、僕はB君の指圖て以て回收した總金額を、福音協會の資産の中へ喜捨して了つた、そしてB君の處へ行つて、貧乏人になつたと云ふ僕の喜を傳へた、

すると彼は云つた、

『君は此から貧乏の人として、自分の勇氣に自惚れ過ぎない樣にし給へ、若し自分の胸中に金佛が貯へてあるとすれば、君の外部丈剝ぎ取つて了つたとて、夫は君の爲に只善くないばかりだ、心から謙讓の人となり給へよ』

丁度話が此處まで進んだ時、二人はポント・ロイヤール橋に達した、セーヌ河の流がアーチ形の橋の下に鈍い悲痛な音を立てゝ流れて居る、水の表面は燈火の光が反射して、ギラリ〳〵と照

り輝いて居つた、

『僕は話を好い頃に切り上げねばならぬ』と云つてウードは再び話を續けた、

『僕の新生活の細かい話をするや一晩もかゝるだらう、夫から僕が父の樣に服從して居たB君は、奴隸貿易に對して戰ふべき全權委員として僕をバストスに遣つた、其處で僕は危險と云ふものと二人で、天幕の中に寢泊りした、そして熱病と戰ひ大旱と爭つて、僕は神の存在を悟るに至つたのだ、

『夫から五年の後、B君は僕を英國に召還した、其時汽船の上で僕は若い娘に出過つた、マア何たる見慣れた顏だつたらう！クルック氏に對して現はれて居た幻よりも、幾層倍光輝燦爛たる

ものだつたか知れやしない、全て幻影なんだもの！

『處が其女は印度の陸軍に居た或大佐の孤兒で、貧乏人で有つたんだ、容貌は殊更美人と云ふ程ではなかつた、其青白い顏色と窶れたる顏とは、見た丈で苦痛が有ると云ふことが分つた、けれど其眼には地上のものでない天上のものだと、人をして自ら想像させるものがチヤンと備はつて居た、そして其體は內部の光で穩かに光り輝いてる樣に思はれた、僕は何れ程彼女を愛したらう！其女を見て僕は萬物の隱れたる意味を計つて見た！實に、其若い女の一瞥で以て、宇宙の調和の秘密が僕に讀たんだ！

『あゝ！其女は、素朴な、極めて素朴な、僕の忠告者で有り、いとしなつかしいの戀女房アニー・フレーザーで有つたんだ、其清淨無

垢な魂の中に僕は女の僕に對して感じた同情を讀むことが出來た、或晩、それは空には星が輝き渡つて、天の樂を奏して居る晩で有つた、丁度二人が甲板の上で出逇つた時、僕は女の手を取つて謂つた、

『アニー・フレーザーさん、私は貴女を愛します、貴方が私と結婚して下さるとすれば、二人に取つて此上もない好都合だらうと思ひますが、私は自分の前途に就て、何事でも勝手に計畫することを止められて居る、それは神樣が適當と思ふ樣に處置して下さる事が出來る爲にです、で、神樣の御心が、私達二人を一所にする樣にあつて呉れゝばと祈つて居ます、私は自分の意志をB樣に云ふ方の手に委せて了つた、英吉利へ歸つたら、直ぐと二人で

其方を訪ねませう、貴女は如何？そして許して下すつたら結婚しませうよ、ねゑアニーさん、お厭？」

『すると女は承諾したんだ、其後航海中二人は國へ着くまで、一所に聖書を讀んで居つた、

『倫敦へ着くと、直ぐと二人はB君の家を訪れた、そして此娘に對する僕の戀が、果して如何する意味のものて有るか、そして其戀が什麼辨別を僕に吹き込んだかと云ふことを一々話した、

『B君は久しい間親切らしい顏附て娘を凝視めて居つた、

『が、とう〳〵謂つた「結婚なさい、使徒パウルは、夫は妻によりて清淨にせられ、妻は夫によりて罪を滅ぼすことが出來ると謂はれたけれども貴方々の結婚は、一番最初の敎會で、基督敎の信者

の間に行はれた貴とい結婚に御眞似なさい、即ち結婚を全く清淨潔白な精神的のものとして、二人の寢床の間には天使の劍が有るものとお思ひなさい、サア、では結婚することにして、何處までも世を隱れ身を卑しうして、決して世間に評判などの立たない樣になさい」

『で僕はアニーと結婚したさ、けれども其結婚は、B君が僕等に命じた條件を充分に守つての上の事だと云ふことは云ふ丈が野暮さ、そして二人は四年間と云ふもの互に兄妹同志の樣な夫婦で樂しく暮らしたものだ、

『其間素朴なアニーのお蔭で、僕は神を知ることに於て非常に進んだ、そして今は最う二人が心を惱ます樣なものは何もなく

なつた、

『其中にアニーは病氣になつて、衰弱が甚しくなつて來たけれども僕等二人は相變らず睦じく、喜んで「天に於けると等しく地に有つても、神よ御意、志を遂げさせ給へ！」と、祈り續けて居つたんだ、

『斯う云ふ風にしてとう〳〵四年が經つて了うと、或日の事、左樣さ、丁度クリスマスだつたよ、B君が僕を呼んだ、

『そして斯う云つたんだ「ウッド君、僕は今迄君の靈魂の爲に、君を試して見たけれども肉に從つての万物の結合と云ふものは、神の嫌ふ所だと信じて了ふのは、天主教的の誤謬に陷るに決つてる、神樣は現に動物にも人類にも、夫婦として二度——地上の

樂園に於ても、ノアの箱舟に於ても、惠を垂れて下さつた、サア、此からはアニーさんと一所になつて、立派な妻のある夫として暮し給へ」

『處が君、如何だ、歸て見ると僕の戀人は死んでるじやないか――

『僕は弱點を白狀する、其時僕は「神よ、御心を遂げさせ給へ」と謂ひはしたが、夫は只僕の口が謂つたので、心が謂つたのては無かつた、そして僕等の戀に對するB氏君の制限の撤去が、餘りに遲かつたのを思つて、僕は口の中に苦味が溢れて、折角の許しも心の中ては灰の樣な氣がしたんだ、

其處て僕は淋しい〳〵獨りぽつちとなつて、其寢臺の下に膝づいた、寢臺の上！其處には君、薔薇の十字架の下に、靜かに白い

頰は、萎れ果てた菫の樣になつて、戀人が永久の眠に就いてゐるてはないか、

『あゝ汝乏しき信仰の輩よ、汝は彼女に別れて後は、一週の間を、絶望にも近き悲痛に陷りたるよ、寧ろ身心共に如何ばかりか之を喜ぶべかりしなるを！……

『夫から八月目の夜のことだ、僕が冷たい誰も居ない寢臺の上に頭を垂れて泣いて居ると、僕は俄かに側に戀人が居ると思つた、

『決して欺されたのぢやない、頭を擧げるとニコ〳〵と笑つて、光り輝くアニーが、僕に向つて腕を差し延べてるんだものを、けれど〳〵夫から後の事が如何して話せるものか、言ふべからざ

ることが如何して言へようぞ君、そして又こんな戀の秘密を洩らすと云ふことが一體君許されるものかい？

『夫はそれとして、B君が「アニーさんと一所になつて、立派な妻ある夫として暮し給へ」と、僕に謂つた彼の時に、彼は明かに戀が死よりも強いと云ふことをチャンと知つてたんだ、

『て君許された喜の其時以來、僕のアニーは、み空の靈香を燻じさせつゝ、毎晩僕の側へ歸つて來たと思つて呉れ給へ』

彼は恐ろしい高い聲で物語つた、

二人は此時既に歩調を緩めて居つた、彼はモロッコ式の一旅館の前で立止つて謂つた、

『僕の居るのは此處だよ、燈光のついてる二階のあの窓が見え

るかね、アニーが僕を待つてるんだ』

斯う謂つて彼はフイと行つて了つた、

夫から八日の後、私は元『世界』通信員レスリー・ウッドの變死した事を新聞で知つた、

（をはり）

七、ド・ルジー夫人

一

千七百九十二年九月十五日のことである、

私がバウリン・ド・ルジー夫人の家を訪ふと、夫人は其手を差し延べて握手を求めた、二人は暫時沈默の儘で有つたが、やがて女は肩掛と麥藁帽子とを無造作に腕椅子の上に投げた、

オルフユースの祈禱書は古琴の上に擴げてあつた、女は窓の方に進んで行つて、今しも韓紅と燃ゆる地平線上に沈まんとする夕日を見守るので有つた、

『夫人！』自分は遂に口を切つた、『丁度二年前の今日此日て

したよ、向ふの河岸のあの山の麓て、貴方が何だか私に謂つたのは！ねゑ、左樣てせう、貴方は今其時の言葉を思ひ出したのてせう、』

『貴方は豫言者のやうな態度て以て、手を動かしながら、今後の審判の日、有罪の日、恐怖の日と云ふやうなものを幻の樣に一々私の眼の前にお見せなすつた事が有る、貴方はあれを覺えて居らつしやるてせう、貴方は私が戀を白狀しやうとするのを制して、正義と自由との爲に、生きて〻最少し働けと仰有つた、ねゑ、左樣てしたらう、夫だから私は其時、思ふ存分泣いて〳〵、貴方の手を接吻することはとう〳〵出來なかつた、けれども其時以來私は少しも躊躇しないて、貴方に敎はつた通りの路を辿りました、

そして其理は手紙で以て申上げた通りです、兎に角に二年の間と云ふもの、爭鬪と憎惡の源をなす所の馬鹿な營養不良の連中にも、同情の看板をかけて急劇なる示威運動で以て人民を籠絡する狡猾政治家にも、それから又未來の權力に頭を下げる臆病者にも、私は悉く反對しました、

女は此時手を振つて私の話を遮り、何かの音を聞けと云ふやうな合圖をした、庭には香ばしい匂が充ちて小鳥が囀つて居る、其庭を隔てゝ『死だ！死だ！』『貴族と一處に死刑臺で』『館の先で死ぬるのだ！』と云ふ樣な叫聲が聞えた、

女は唇に指を當てた儘でジッとして居た、顏色は既に眞靑になつて居る、

『あれは誰か不幸な奴が追かけられてるのだ、追手の奴等は、夜晝家宅搜索をやつて逮捕を實行して居る、此處へもやつて來るかも知れない、貴方に心配を掛けるのも心もとないから、私は逃げるとしませう、此近所には殆んど私を知つたものはないが、追々と危險なお客さんですからねえ』

『お待ちなさい！』夫人は私に命令した、

例の叫聲が今度は夕べの靜寂を破つて響いた、騷がしい足音と、武器の響さへも今は交つて居る、追手が近寄つたのだ、『逃げられない樣に、路を塞げ、路を！』と云ふ聲が聞える、

ルジー夫人は危險の近づくに從つて、却つて段々落ち着いて來る樣に思はれた、

『ねゑ二階へ上りませうよ、吃度籠越に、外の樣子が分るてせうわ』

けれども二人は開き戸を開けると同時に、階下の平床の上に半裸體の落人が坐つてるに氣附いた恐しさの爲に、顏色は眞青になつて齒の根も合はず膝頭はブル〳〵と震へて居る、幽靈の樣な男は、絶切れ〳〵に聲を絞つて謂つた、

『助けて下さい、隱して下さい、其處に居る、其處に……家の門の中へ暴れ込んで、庭を荒らして了つたんてす、最う來居るてす……どうぞ〳〵』

二

老人はブランショテーと云つて、隣の家に住つて居る哲學者で有る、ルジー夫人は之を見て聲を細めて尋ねた、

『家のクックが貴方を見ましてゝ？あれはジャコビンなんてすよ』

『誰も見なかつたてす』

『おゝ難有い！』

夫人は斯う謂つて、自分の寢所に老人を導いた、私は其後を追ふた、二三日か少くも數時間は、老人を隱まして、搜索隊を誤魔化す樣な場所を見附けねばならぬ、相談の結果、自分は番人の役を勤め、萬一の合圖をした時には、老人は直に庭の小門から逃げなければならぬと云ふ約束をした、

斯うして待つて居る間も、老人は立ち續けて居る事が出來なかつた恐しきの爲に全身が痲痺れて了つて居たのである、

老人は憲法に背いて、カゾット君と共謀した爲に、それから又八月の十日には、ツイエリー宮殿の保護者の一人となつたが爲に、換言すれば僧侶と國王との敵で有るが爲に、斯麼風に追はれてるのだと謂ふことを、やつとの事で吾等兩人に知らせたのて有つた、處が夫は不名譽極まる讒言で有つて、其實ルビンと謂ふ男が、自分の怨を晴らさうとしてるのだと云ふ事である、其ルビンと云ふ男は、つい此頃迄プランショチーの牛殺して有つて、主人から物を敎はる際には、殆んど度々の樣に毆られんとしたので有つた、そして夫が今、其昔僅かに牛小舍番て有つた地方の親

方をして居るので有る、

プランショチーが息も絶え〳〵にルビンの名を謂つた時、彼は實際ルビンの姿を認めたやうな心持がして、兩手て以て自分の顏を蔽ふた、そして實際亦階段の上ては、人の歩む足音が聞えたので有つた、ルジー夫人は直に老人を衝立の後ろに押込んだ、其時室の人口の戸がコツ〳〵と鳴つた、之に續いて、開けて下さい、市の役人が、軍隊を連れて門口に來て、家宅搜索をすると謂つてると云ふコックの聲が聞えた、女コックは更に附添つて謂つた、

『役人達は、此家にプランレョチーが居ると謂つてます、妾は勿論、其麼ことないと云ふことを確に知つて居ります、奥さんは彼

廉悪漢を家に闖うなんてことは決して爲さいませんわねゑ、けれども お役人達は妾の謂ふことを本當にしないんてすものを、』

『てはマア、善いからお入らしよ、そして天井から穴倉まで、家中隈なく探さして見たら善いだらう』

ルジー夫人は戸を隔てゝ斯う答へた、此話を聞いて居つた老人は、可愛想に衝立の後ろて氣絶した、私は顳顬から水をかけなどして、やつとの事て息を吹き返させたのて有つた、丁度其時若い夫人は隣の老人に囁いた、

『ねゑ伯父さん、私にお任せなさいよ、女の企計て云ふものは、隨分根氣のいゝものてすよ、』

やがて靜に、日々の家事をする樣に、夫人は自分の寢臺を奥の

方から少しく引出して、寢具を取り除け、私が手傳つて、三枚の毛布團を併べて、其一番高い所と低い所との間に壁に接して隙を工夫するやうにした、

夫人が斯廉ことをしてる間に、履の音や、銃床の音や、喧がれた聲が階段の下の方から聞え出した、吾等三人に取つて此程恐ろしい時はなかつたが幸にも其音は段々と三階の方へ上つて行た、搜素隊はジャコビン黨のクックに案内されて、先づ三階から搜素するのだと分つた、天井がクラッ〳〵と音がして、脅嚇の聲と粗々しい笑ひ聲とが響いて、更に壁板を蹴り銃槍を衝き立てる音が聞えた、吾等三人は再びゾッとしたけれど〳〵、一秒と謂へども躊躇することは出來ぬ、私は夫人が毛布團の間に工夫し

た隙へ老人を引摺り込んだ、

此有樣を見て居た夫人はカブリを振つた私は急で手を退けたそれがため寢床は如何しても嫌疑を免るゝことは出來ぬ樣に思はれた、

夫人は自分で寢臺に觸つて、疑はしい所の無いやうにせうと努つたけれども夫は遂に駄目で有つた、

夫人は時計を見た丁度七時で有つた、自分で其處へ寢やうかと思つたけれど、其處に早くから寢所に這入ると云ふのは却て怪しいと見られるだらう、夫ては假病に成うか、否々夫も駄目て有る、ジャコビン派のクックが謀計を發き出すに決つて居る、

夫人は暫時考へた儘て立つて居たが、やがて落着いて、無造作

にパッ〳〵と私の前て素裸になつて、寢床に潜り込んだ、そして私に履と上着とを脱き棄て、襟飾まて取つて了へと謂つて、更に、

『只最う貴方が私の戀人になつて了つて、一處に寢てる所を見せて、彼等を騙かすより外はない、搜索隊がやつて來た時に、貴方は狼狽へて着物を着る暇もない樣にお見せなさい、そして髮は亂れたなり、短衣の儘て入口の戸を開けて遣つて下さい、』

自分達の準備が全く出來上つた時に、惡漢！畜生！と云ふ數多の叫聲に連れて、搜索隊がドヤ〳〵と三階から下りて來た、

憐れなるプランショネーは、此時發作性の戰慄に摑まつて、ブル〳〵ッと震へた、寢臺全體は之が爲に震動した、

加ふるに彼の呼吸は漸く烈敗なつて來て、殆んど廻廊からさ

へ聞えた位で有つた、

『情ない！妾は僅かな手細工て満足して居たけれども御心配なさるな、失望するには及ばないです、神様も助けて下さるでせう』夫人は低い聲てつぶやいた、

重々しい拳固が戸を揺がした、

『何誰？』と夫人は尋ねた、

『國民の代表者だ』

『一寸待つて頂けませぬか、』

『開けろ、開けなきや打ち毀すぞ』

『夫ぢや貴方ね、行つて開けて頂戴な！』

不思議にも、ブランショヂーは、俄かに喘ぐことも慄へること

も止めた、

三

最初に室内へ這入つたのはルピンて有つた、彼は肩掛を脱けて、一ダス許の從者は皆矛を携へて居つた、室内に入ると先づは、ルジー夫人尋ては私の顔を見たルピンは

『畜生！成程戀の邪魔をした樣だな！許して呉れ給へ、ねる美人君、』

斯う諸つて從者の方へ向いて

『斯麼時に、什麼したら善いか知つてるのは過激共和黨丈た』

けれども此光景に接しては、流石のルピンも其主義に反して、

聊か快活の人とならなければならなかつた、

彼は寢臺の上に腰を下ろして、可愛らしい氣品の高い婦人の顯を持上げて謂つた、

『此の可愛い口は、夜も晝も祈禱ばかりするために出來たものではない、萬一左樣だとすると情ないものだらう、けれども共和は萬物の前に共通だ、安心なさいよ、吾々は只反逆人のブランシヨネーを探してるのだ、奴は確かに此處に居るのだ、私は什麽しても、捕へて絞臺へ載けて貰はにやならぬ、左樣すりや私の運が開けるのだ、』

『ぢやお搜しなすつたら宜いわ』

一同は椅子の下から食卓の下から、さては膳棚の中まで探し

廻はして更に寢臺の下を槍で突いたり、毛布團の中に劍を衝込んだりして檢査した、けれどもこれぞと思ふ所もない、

ルビンは頭を搔いて、斜視に私の顏を見た、夫人は私が却て進退谷まる樣な破目に陷つてはと、心配の餘りに口を切つた、

『ねゑ貴方、貴方は此家を能く御存じでせう、だからね、鍵を持つて行つて隈なくお眼に懸けて下さい、國の爲になさる方々なんだから、貴方も喜んで案內して下さるでせう、』

私は一同を穴倉に導いた、彼等は此處で薪の積山を引くり返へして、可成に澤山の酒德利を空にした、其後でルビンは、鐵砲の臺尻を以て酒樽を打壞し、穴倉の床が酒浸りになるのを見て、さて不精無精に出發の合圖をした、私は一同を門まで見送つて、皆

が出て了ふとピシャリと門を閉ぢて、夫人の所へ走り戻つて、もう大丈夫だと知らせたので有る、

自分が此報を傳へると、夫人は丁度、壁に接した寢臺の側に頭を垂れて

『ブランショネーさん、ブランショネーさん』

と呼んだ、

答は有るか無きかの歎息て有つた、

夫人は絶叫した、

『おゝ難有い！ブランショネーさん、貴方はマ、ア、人を吃驚させますね、妾は貴方が息が切れたのかと思ひましたよ』

やがて夫人は私の方へ向いて

『貴方はねゑ、始終私を愛する〳〵と謂つては喜こんて居らしたてせう、けど最う貴方は今度に懲り〳〵して、二度と左樣は仰有らないてせうわねゑ！』

（をはり）

八、死の賜

アンドレーは荒れ果てた街衢を暫く通り歩いた後で、セーヌ河の川岸へ來た、そして其處に腰を下ろして、小山の裾を洗ふて流れる川水を凝視て居た、山の麓には、昔の彼が戀女房ルーシーの家が有つた、アンドレーは今山の麓を眺めて、消え去つた喜と希望の日の事を憶つて居る、

此まで頗る長い間と云ふもの、アンドレーの心の休まる日とては一日も無かつたのて有る、

八時になると、アンドレーは水浴をして、バレー・ロワアルの飯屋に馳け込んて、料理を待つ間を澤山な新聞に眼を通した、そし

て『平等の急使』欄を見て居る中、八月（最初の佛蘭西共和國曆の第八月にて、今の四月二十日より五月十九日に至る間）の廿四日を以て、『革命の地』て死刑に處せられた罪人の表が眼に附いた、

アンドレーは朝飯を腹一杯詰め込んだ、やがて立上つて鋭の前に進んで、自分の着物の着振りが人を訪問するに無作法ではないか、顏色が平生と異つて居らぬかを見屆けた上て、ぶらりぶらりと橋を渡つて、セーヌ街とマザリン街の角に在る低い家の方に向つて歩いた、此邊りは、革命審判所の代官ラーヂョンの受持區域て有る、アンドレーは、始めはアンジエールの道士として、其後は巴里の過激共和黨の一員として、ラーヂョンに知られ、爾

來彼の愛顧を受けて居るので有る、

アンドレーがラーヂョンの家を訪ふてベルを鳴らすと、二三秒の後には、格子戸の後ろに人影が顯はれて『お入り』と謂つた、やがてラーヂョンは、來客がアンドレーで有る事を知つて、さも嬉しげな顏附をして戸を押し開いた、ラーヂョンは顏の廣い眼光炯々として、唇の濕つた耳、の赤い男で、頸には高襟を着けて居る、一見した所で快活では有るが、何となしに顏には心配の色がほの見えて居る、彼は直にアンドレーを導いて玄關の間に案內した、

其處に小さな圓い食卓の上には、チキン、バイ、ハム、冷肉等丁度二人前の御馳走が併べて有つた、床の上には六本の德利が桶の

中に冷してある、それから暖爐棚の上には、パイナップルや各種の乾酪や、藏麗の菓物や、そして紙の散らばつた机の上にはフラスコが置いて有つた、

半分許り戸の開いた次の部屋には、まだ片附けてない大きな寢床が見えて居る、

『ラーヂョン樣』アンドレーは口を切つた『私はお願が有つて參りました』

『ハア、共和國の安寧に害のあるやうなものでさへ無ければ、何でも僕は聽いて上げるさ、』

アンドレーはニヤリと笑つて答へた、

『私のお願したいと云ふことは、共和國の爲にも貴方の爲にも、

些とも御心配の入る樣なことではないのです』

主人の合圖で客は腰を下ろした、

『貴方は御存じでせう、此二年と云ふもの、私は貴方のお友達に對して反對黨を組んで、加之に「恐怖の祭壇」と云ふ出版物を、私が書いたと云ふことを、今貴方が私をお捕へになつた處で、何も私の爲にはなりませぬ、只貴方は御自分の勤を爲さる丈でせう、それに夫は私が貴方のお手をお借り申したい事では無いのです、けれど、けれど、お聞き下さい、私の妻！あの私が惚れ込んで居る妻は牢屋の中に居ります、』

アンドレーの白狀する樣に、彼が其妻に戀ひ焦れで居ると云ふ事は事實である、ラーヂョンは聞いて成程と頷いた、

『ラーヂョン樣、貴方は確に無情の方では有りませぬ、お願ですが、出來る丈早く私をリーブルの港へ遣つて、妻と一所になれる樣にして下さい』

『マア、』ラーヂョンは謂つた、柔さしい締つた唇には微笑が顯はれて居た、『マア、夫は君が要むる命よりも大きな賜だ、君は僕に幸福を與へよと謂ふのだ、ねえ、』

斯う謂つて、隣りの間の方に向いて居た方の腕を延ばして呼んだ、

『エピシャリー、エピシャリー』

聲に應じてデップリ太つた、色の黑い夫人が此室へ入つて來た、帽子の紐は結んで有つたが、化粧と謂へばまだ下着とペチコ

トを着けた丈て有つたので、咽の邊りも兩腕もまだ露はれて居た、

夫人を膝の側へ引寄せてラーヂョンは謂ふ、

『あのねえ、此方の顏を能く覺えてお置きなさい、エビさん、此方は本當に心の柔さしい方だよ、世の中で一番忌々しい事はね、戀人と離れてることだつて、全く私達の樣だねえ、それてねえ、奥さんと一所に牢屋所か絞臺へまて上りたいんださうだ、如何して私に夫が拒めるだらう、ねえ、エビさん』

『さうですわねえ』と謂つて、女はアンドレーの兩頰を輕く打つた、

『全くだよ、戀人同士を喜ばせて遣りたいんだものねえ、アンド

レー君、君の處を謂つとき給へ、そしたら今晩プールブへ宿れるやうにして上げるから、』

『御承諾下さるですか』

『無論さ、』ラーヂョンは其手を差し延べて、握手を求めながら斯う謂つた、

『君行つて妻君に遇つて、エビシャーリーがラーヂョンに抱かれて什麼したか話し給へ、左樣すると君は思出して、屹度嬉しくつて胸が亂れるやうな事が有るだらう、』

之に對して、二人は確に最つと〳〵戀しい〳〵記憶を呼び起すことが出來るだらう、貴方に對する感謝の念は云ふに言葉のない程て有るが、情ない事には御恩報じの勤めが出來さうにも